

研究活動報告

List of research activities

(2007年1月1日～2007年12月31日)

ここに収録された題目及びその概要は、学内研究者の発表したもののうち、2007年1月1日より2007年12月31日迄の期間に刊行されたものに限り、論文の性質、発表機関などには一切制限を加えず、すべて規定の用紙で提供された原稿のまま掲載した。なお、掲載順序は、提出順とした。

佐久間和彦

学会発表

牽引走トレーニングがCK値と筋の痛みに及ぼす影響 杉浦雄策, 櫻庭景植, 佐久間和彦, 右田孝志 第18回日本臨床スポーツ医学会学術集会 大分 2007. 11 (要旨集: p. 194)

要旨

走者を超最大レベルで走らせる牽引走後と全力走後とのCK値および筋の痛みを比較検討した結果、CK値では両者間に有意差は認められなかった。また主観的な筋の痛みは疾走条件の違いによる差が認められなかった。

小林 義雄

【著書】

平成18年12月13日に行われた、東京都立上野高等学校「フロンティア講座」の講演内容要旨を、同校の同窓会誌『東叡』に掲載した。演題は、「伝統文化としての剣道に学ぶ」であり、「剣道の歴史及び特性」「剣道学習の基本」などについて、実際に演武を交えて講演したものである。東叡会（東京都立上野高等学校同窓会）『東叡』（第38号）18-19, 2007. 10

連載「師の背中（102）」において、本学名誉教授である清野武治先生について述べた。先生のご経歴や研究テーマ「日本古来の刀法とその精神の研究」の背景を具体的な事例を挙げながらまとめた。月刊誌『剣道日本』, 14-15, 2007. 11月号

原田 睦巳

〈原著論文〉

平行棒における「ペーレ」の技術に関するモルフォロジー的一考察

著者：富田洋之, 原田睦巳, 伊藤政男 体操競技・器械運動研究15号: 21~30, 2007. 3

「ペーレ」の後方2回宙返り局面における「背屈頭位」と「腹屈頭位」に着目し、モルフォロジー的観点から技術的相違を明らかにし、「腹屈頭位」で実施した方が合理的で運動質の高い技術であることが示唆された。

平行棒における「棒下宙返り倒立」の技術に関するモルフォロジー的一考察

著者：鹿島丈博, 原田睦巳, 伊藤政男 体操競技・器械運動研究15号: 31~41, 2007. 3

平行棒の「棒下宙返り倒立」における従来の技術と新しい技術の相違について明らかにするとともに、新しい技術が棒下宙返りにひねりを融合させる技に有効であることをモルフォロジー的観点から明らかにした。

〈報告書〉

スポーツ指導者海外研修事業 平成18年度帰国者報告書

財団法人日本オリンピック委員会 2007. 3

スポーツ指導者海外研修事業（短期）に参加し、現地研修先等での指導法の研修内容や競技会における日本との相違について報告を行った。

第24回ユニバーシアード競技大会（2007//バンコク）
日本代表選手団報告書

財団法人日本オリンピック委員会 2007. 11

当該競技大会における大会期間中のコンディショニングの状況や大会結果について報告を行った。

〈ポスター発表〉

跳馬の助走に関するバイオメカニクス的研究

著者：田代恭平，高田佑輔，原田睦巳，加納実，柳谷登志雄 第20回日本トレーニング科学会 2007. 11

跳馬における助走と全力走におけるフォーム及びスピードの相違に着目し研究を行った結果，速度及び動作について相違が見られた．特に跳馬の助走のための動きをしていることが明らかとなった。

跳馬の助走とスコアの関係について

著者：柳谷登志雄，田代恭平，高田佑輔，原田睦巳，加納実 第20回日本トレーニング科学会 2007. 11

跳馬における助走速度及び速度変化パターンを分析するとともに，助走速度とスコアの関係について研究を行った結果，助走速度が速いほど，Aスコア，Bスコアともに高い結果が明らかとなった。

〈講演〉

金メダルへの道 ～アテネオリンピックを振り返って～ 千葉県習志野市教育委員会市民スポーツ講座 2007. 1

綾部 誠也

【論文】

大学競泳選手におけるスタビライゼーション能力と競泳競技との関連性. 綾部誠也, 佐藤和樹, 小林生海, 鈴木大地, 形本静夫, 内藤久士. トレーニング科学(2007) 19. 275-281.

歩数計による中高強度身体活動時間の評価. 綾部誠也, 青木純一郎, 熊原秀晃, 田中宏暁. 肥満研究(2007) 13. 197-200.

大学アルペンスキー選手のオフシーズンの有酸素性作業能と身体組成の変化. 綾部誠也, 辻川比呂斗, 宮原祐徹, 黒坂光寿, 佐賀典生, 笹田周作, ほか. 順天堂大学スポーツ健康科学研究 (2007) 11. 73-79.

誰にでもできる健康づくりのための運動. 綾部誠也, 内藤久士, 形本静夫. 食と健康 (2007) 51. 51-57.

【研究報告】

模擬的調理作業における身体負荷. 綾部誠也, 形本静夫. 厨房の暑熱環境による調理人への影響調査報告書

作業負荷と身体負荷の関連. 綾部誠也, 形本静夫. 厨房の暑熱環境による調理人への影響調査報告書

【学会発表】

メタボリックシンドローム患者の中等度身体活動パターンに関する検討. 熊原秀晃, 綾部誠也, 飛奈卓郎, 吉村英一, 形本静夫, 青木純一郎, 清永 明, 安西慶三, 田中宏暁. 第27回日本肥満学会

エクササイズガイド充足者の中等度身体活動の継続時間と頻度. 綾部誠也, 青木純一郎, 熊原秀晃, 内藤久士, 形本静夫, 田中宏暁. 第61回日本体力医学会

一定の血中乳酸濃度に相当する泳速度およびCSSとオープンウォータースイミングの競技記録との関係. 小林生海, 内藤久士, 綾部誠也, 鈴木大地, 山岸威夫, 形本静夫, 青木純一郎. 第61回日本体力医学会.

加速度計内蔵防水機能付小型身体活動モニタによる自由形泳の泳速度およびストロークの評価の有用性. 綾部誠也, 青木純一郎, 鈴木大地, 小林生海, 内藤久士, 形本静夫. 第57回日本体育学会大会.

Body temperature after the open water swimming. Ayabe M, Suzuki D, Kobayashi I, Naito H, Katamoto S, Aoki J. 12th ECSS

A study of locomotion speed of top-level college soccer players during a game. Miyamori T, Yoshimura M, Ayabe M, Nagao M, Miyahara Y, Suzuki S, Kobayashi A, Hasegawa N. 12th ECSS.

Increasing physical activity levels in chronic disease populations: does type of activity monitor make a difference? Ayabe M, Brubaker PH, Mori Y, Kumahara H, Naito H, Katamoto S, Tanaka H. 54th ACSM

Pattern of physical activity in overweight/obese older adults with CVD or the metabolic syndrome. Mori Y, Brubaker PH, Ayabe M, Kumahara H, Nesbit B, Williams C, Tanaka H, Rejeski J. 54th ACSM

Effects of spontaneous running on heat shock protein in rat plantaris muscle. Kurosaka M, Naito H, Ogura Y, Ayabe M, Miyahara Y, Saga N, Katamoto S. 54th ACSM

Comparison between the effect of ballistic stretching and static stretching on maximal voluntary contraction. Miyahara Y, Ogura Y, Naito H, Ayabe M, Saga N, Kurosaka M, Katamoto S. 54th ACSM.

An evaluation of thermal stress in the kitchen working environment by a self-reporting questionnaire. Haruyama Y, Muto T, Matsuzuki H, Muto S, Tomita S, Haratani T, Itoh A, et al. 18th JCK Occupational Health.

The relationships between the “heat” and “burden” felt by workers and their work environment. Matsuzuki M, Ayabe M, Haruyama Y, et al. 18th JCK Occupational Health.

Effects of heat source with cooking heater on physiological responses: Comparison of induction heating system versus gas burner. Ayabe M, et al. 18th JCK Occupational Health.

女子学生における日常身体活動水準と身体作業能の関連. 北爪祐実, 長田朋樹, 内藤久士, 形本静夫, 綾部誠也. 第14回日本健康体力栄養学会.

随意的噛み締め動作が柔軟性に及ぼす影響. 加賀山淳, 宮原祐徹, 内藤久士, 形本静夫, 綾部誠也. 第14回日本健康体力栄養学会.

一人で行う PNF ストレッチの有効性に関する研究. 小川大志, 宮原祐徹, 内藤久士, 形本静夫, 綾部誠也. 第14回日本健康体力栄養学会.

岩崎 香

〈著書〉

精神障がい者の生活サポートハンドブック 社団法人日本精神保健福祉士協会企画部権利擁護委員会編著 へるす出版 2007. 3

全119ページの編集と、障がい者の社会参加の実態、ホームレス、オンブズパーソン、成年後見、地域福祉権利擁護事業、女性の人權、障がい者の愛と性、ピアサポート、生活支援に向けた今後の展望など、36ページを執筆。

PSWのための権利擁護ナビⅡ 東京精神保健福祉士協会権利擁護委員会編著 東京精神保健福祉士協会発行 2007. 5

本著は、東京精神保健福祉士協会権利擁護委員会の第2集目の事例集として、発行したものであり、日常的な「権利」の問題に関する検討の成果をまとめたものである。全体の編集と、事例執筆を担当。

〈学術論文〉

ソーシャルワークにおけるアドボカシーの位置づけとその変遷, 鴨台論集第16号, pp 36-44, 2007. 3

アメリカにおけるソーシャルワークの中で、アドボカシーがどう位置付けられてきたのかをレビューし、歴史的な位置付けを明確化した。また、アドボカシーの実践的定義を提示し、現状に照らした課題を明らかにした。

精神科医療におけるソーシャルワーカーの権利擁護と倫理, ソーシャルワーク研究 Vol. 33, No. 1, pp 22-28, 2007. 4

昨今、患者の権利や倫理綱領が掲げられている機関が増えている。本稿では、精神科医療領域を中心にソーシャルワーカーの権利擁護と倫理の問題について論じ、現状と課題について論じた。

岐路に立つ精神保健福祉士, 心と社会38巻3号, pp32-36, 2007. 9

平成9(1997)年12月に精神保健福祉士法が成立してから10年が過ぎた今、精神保健福祉士は何を求められ、何をめざしていくのか、社会福祉士法改正を睨みつつ、その歴史的な変遷を辿りながら、今後を展望した。

精神科デイケア通所の統合失調症患者を対象としたダンス・アクティビティの適用の試み, 順天堂大学スポーツ健康科学研究第11号, 2007. 3 (中村恭子 広沢正孝 岩崎 香他) *中村恭子の項参照

〈学会発表等〉

～安心できる暮らしのために～『精神障がい者の生活サポートハンドブック』作成の目的と経過(宮崎まさ江, 岩崎 香, 伊藤亜希子他) 第42回日本精神保健福祉士協会全国大会・第5回日本精神保健福祉学会(宮崎) 2007. 6

2006年度の日本精神保健福祉士協会権利擁護委員会の事業として, 精神障害者の権利に関する普及・啓発を促すハンドブック作りに取り組んだ. その経過と反響をまとめ, 発表(精神保健福祉 Vol. 38, No. 3 P268参照).

日常の中から権利について考える第2報—東京精神保健福祉士協会権利擁護委員会の活動から—(松永実千代, 岩崎 香, 山田恭子他) 第42回日本精神保健福祉士協会全国大会・第5回日本精神保健福祉学会(宮崎) 2007. 6

成年後見制度や地域福祉権利擁護事業などの制度活用に留まらない日常的な「権利」の問題に気づいたプロセスと, 活動を通して意識化を働きかけてきた成果について発表した(精神保健福祉 Vol. 38, No. 3 P266参照).

精神科デイケア通所の統合失調症患者を対象としたダンスアクティビティの試み(2)—体力および精神面に及ぼす影響—(中村恭子, 広沢正孝, 岩崎 香, 他) 第50回日本・病院地域精神医学会(京都) 2007. 10 *中村恭子の項参照

PSWの新たな役割と課題—成年後見人としての実践を通して—(岩崎 香・長谷川千種) 第15回日本精神障害者リハビリテーション学会(名古屋), 2007. 11

PSWが当事者の身上を配慮するという後見人の職務の範囲で, かかわることには困難や限界もある. しかし, 時代の要請として, 避けてとおることはできないこともまた, 現実であり, 実際に後見人として支援している経験から, その必要性と有効性について発表した.

吉村 雅文

国際学会発表

THE JOINT PROBLEM MARKER'S ESTABLISHMENT AND ITS APPLICATION IN SOCCER PLAYERS.

M, Yoshimura, I, Nagaoka, Y, Miyahara, Y, Aoba, A, Tsuruta. 12th ANNUAL CONGRESS OF THE EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE FINLAND. 307: 2007

EFFECT OF STATIC STRETCHING ON MAXIMAL VOLUNTARY ISOKINETIC TORQUE PRODUCTION.

Y, Miyahara, M, Yoshimura, H, Naito, Y, Ogura, H, Tsuchikawa, S, Katamoto. 12th ANNUAL CONGRESS OF THE EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE FINLAND. 330: 2007

A STUDY OF LOCOMOTION SPEED OF TOP-LEVEL COLLEGE SOCCER PLAYERS DURING A GAME.

T, Miyamori, M, Yoshimura, M, Ayabe, M, Nagao, Y, Miyahara, S, Suzuki, A, Kobayashi, N, Hasegawa. 12th ANNUAL CONGRESS OF THE EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE FINLAND. 659: 2007

菰田智恵子

〈論文〉

T. Kimura and C. Komoda, **Weakly infinite-dimensional compactifications and countable-dimensional compactifications**, to appear in *Commentations Mathematicae Universitatis Carolinae*.

In this paper we gave a characterization of a separable metrizable space having a metrizable S -weakly infinite-dimensional compactification in terms of a special metric. Moreover, we gave two characterizations of a separable metrizable space having a metrizable countable-dimensional compactification.

〈学会発表〉

菰田智恵子 **C-空間に関する写像定理** 日本数学会

2007年度秋季総合分科会 トポロジー分科会 講演アブストラクト集 pp. 86-87 2007年9月.

孤田智恵子 C-空間の写像定理 京都大学数理解析研究所 研究集会「一般および幾何学的トポロジーの現状と諸問題」2007年10月.

岩本 (星本) 正姫

<学術論文>

「Effects of supplemental O₂ inhalation on cerebral oxygenation during exercise in patients with left ventricular dysfunction.」

Koike A, Nagayama O, Goda A, Hoshimoto M, Yamaguchi K, Tajima A, Uejima T, Itoh H, Aizawa T. Circulation Journal. 2007 Sep; 71(9): 1418-23.

The present study evaluated whether the inhalation of supplemental O₂ diminishes the decrease in cerebral O₂Hb during exercise. Impaired cerebral oxygenation during moderate to heavy intensity exercise in patients with left ventricular dysfunction can be offset by breathing supplemental O₂.

<学会発表>

Is O₂-pulse obtained from respiratory gas analysis useful for estimating the stroke volume during exercise in cardiac patients with left ventricular dysfunction?

Hoshimoto M, Koike A, Nagayama O, Yamaguchi K, Tajima A, Goda A, Aizawa T

Journal of American College of Cardiology 49: 151A, 2007

To compare O₂-pulse during exercise and stroke volume in patients with left ventricular dysfunction. Although O₂-pulse has been underrated among the established respiratory gas indexes during exercise, it can be used as an additional useful and noninvasive parameter reflecting the stroke volume during exercise in patients with left ventricular dysfunction.

Determination of the VE/VCO₂ slope from a constant work rate exercise in cardiac patients

Hoshimoto M, Koike A, Nagayama O, Yamaguchi K, Tajima A, Goda A, Aizawa T

Journal of American College of Cardiology 49: 183A, 2007

順天堂大学スポーツ健康科学研究 第12号 (2008)

To clarify whether the VE/VCO₂ slope can be determined through a constant work rate exercise in cardiac patients. The VE/VCO₂ slope might be determined from constant exercise even at a mild to moderate intensity, perhaps because the relationship between ventilation and CO₂ output is consistent and independent of the modes of exercise testing.

End-tidal PCO₂ (PETCO₂) during exercise predicts future cardiovascular events in cardiac patients

Hoshimoto M, Koike A, Nagayama O, Yamaguchi K, Tajima A, Goda A, Aizawa T

Journal of American College of Cardiology 49: 330A, 2007

We compared the prognostic power of PETCO₂ at peak exercise with those of established respiratory gas indexes during exercise testing in cardiac patients. A lower PETCO₂ at peak exercise is useful to predict future cardiovascular events, especially cardiovascular-related deaths, in CAD patients.

境界型糖尿病患者 (PDPt) に対する運動・食事療法の効果 (第1報)

丸山麻子, 加藤祐子, 小池 朗, 小山良治, 星本正姫, 山田樹央, 桜庭景植, 高山重光 日本臨床スポーツ医学雑誌 15(4), S171, 2007. 11 “丸山麻子”の頁参照

水野 基樹

【著書】

岸田孝弥監修, 久宗周二・水野基樹編著『実践産業・組織心理学』創成社, 平成19年3月

産業現場の事例を中心にした改善活動に関する実践書である。全体的な編集および第18章「スポーツフィットネスクラブ従業員の雇用形態とキャリア成熟に関する研究」の執筆を担当した。

【論文・学会発表・Proceedings】

「Effects of “Concern for Others” of Japanese Nurses on Psychological Stress」

Authors: Yamada Y, Mizuno M, Hirokawa M, Mizuno Y, Matsuda F, Koizumi T, Sakai K

順天堂大学スポーツ健康科学研究, 第11号, 平成19年3月, 31-36頁.

The purpose of this study is to examine the negative effects of the “concern for others” of Japanese nurses on their stress. The psychological stress was understood by the stress concept of Lazarus. We focused on the work-family spillover as new type stressor in modern Japanese society. As the results, those who have the “concern for others” shows high score on work-family spillover scale and negative stress response.

「An empirical study on work stress and health condition of Japanese nurses」

Authors: Mizuno M, Yamada Y, Mizuno Y, Matsuda F, Koizumi T, Sakai K

順天堂大学スポーツ健康科学研究, 第11号, 平成19年3月, 58-63頁.

The findings suggest that nurses should be managed in consideration of the above adequately to decrease the work stress and bad health conditions. The implication of this study is that the intervention as one of the organizational designs to reduce the work stress and enhance the health conditions can improve the effects of the job satisfaction and work-family balance. Reduction of the work stress and enhancement of the health conditions also appeared to be helpful for work motivation of nurses in Japan.

「家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー尺度は看護師の健康状態まで正しく評価するか？」

研究者：山田泰行・水野基樹・広沢正孝・小泉智恵・酒井一博

産業保健人間工学研究, 第9巻, 1号 (印刷中)

本研究はF-W-NSPと良好な健康状態の間に認められる負の相関が擬似相関であることを実証するために、交絡因子を探索した。その結果、「支持的職場風土」という交絡因子が抽出され、擬似相関が実証された。

「Effect of Typus Melancholicus on cognition of job stressor among Japanese nurses」

Authors: Yamada Y, Miyuki S, Nishi Y, Hirose M, Tanaka S, Mizuno M

The 18th Japan-China-Korea Joint Conference on Occupational Health, Program and abstracts, pp. 131-132. (Nagoya Congress Center Nagoya, Japan)

The purpose of this study is to examine the effect of TM

on the process of cognition of job stressor among Japanese nurses. As the result, this study proved that TM's components of Sthenic and Asthenic traits have significantly positive effect on the cognition of job stressors among Japanese nurses. However, Sthenic trait showed negative effect to some kinds of job stressor.

「Prevalence of Eating Disorder among Japanese Nurses」

Authors: Miyuki S, Nishi Y, Yamada Y, Hirose M, Tanaka S, Mizuno M

The 18th Japan-China-Korea Joint Conference on Occupational Health, Program and abstracts, pp. 209-210. (Nagoya Congress Center Nagoya, Japan)

The purpose of this study was to reveal the prevalence of eating disorder in Japanese nurses who work in general hospitals and to compare the features of eating disorder which are seen among younger nurses with those of expert nurses who are older in age. Although, this study revealed the prevalence of eating disorder in Japanese nurses, predicting, causing, and promoting factors of eating disorder have not been determined.

「Obsessive-Compulsive Symptom and Medical Accidents among Hospital Nurses」

Authors: Nishi Y, Yamada Y, Miyuki S, Hirose M, Tanaka S, Mizuno M

The 18th Japan-China-Korea Joint Conference on Occupational Health, Program and abstracts, pp. 211-212. (Nagoya Congress Center Nagoya, Japan)

This study examined the characteristic roles of obsessive-compulsive symptom in relation to depression and the frequency of medical incidents/accidents among hospital nurses. As the result, the frequency of accidents was higher where depression occurred independently or with obsessive-compulsive symptom than where obsessive-compulsive symptom occurred independently.

「Practical Steps for Developing Road Maps of Ergonomics Application in Major Technical Areas」

Authors: Horino S, Kogi K, Sakai K, Kishida K, Mizuno M, Ebara T, Hongson S, Ohashi T

The Proceedings of the Eighth Pan-Pacific Conference on

Occupational Ergonomics, CD-ROM (Bangkok)

Typical advances to be attained until around 2030 are people-centered systems standards in work and dairy life, universal design guidelines of public facilities, transport and houses, people-friendly design procedure of product, transport systems and environment, safety and health management requirements, and user-friendly communication technologies and networks.

「Relation between Typus Melancholicus and Medical Accident in Japanese Nurses」

Authors: Yamada Y, Hirokawa M, Sugiura M, Okada, Y, Mizuno M

The Proceedings of the Eighth Pan-Pacific Conference on Occupational Ergonomics, CD-ROM (Bangkok)

The purpose of this study is to examine the relation between the melancholic type of personality (in German, Typus Melancholicus; TM), burnout, and medical accident among Japanese nurses. As the results, it is proved that the burnout-medical accident process is different by the personality features based on TM.

「Relationship between Depersonalization Syndrome and Obsessive-Compulsive Symptom among Japanese Nurses」

Authors: Sugiura M, Hirokawa M, Yamada Y, Nishi Y, Mizuno M

The Proceedings of the Eighth Pan-Pacific Conference on Occupational Ergonomics, CD-ROM (Bangkok)

The purposes of this study were the following; first, to reveal the prevalence of depersonalization among nurses and second, to investigate relationship between depersonalization syndrome and obsessive-compulsive symptom. The results of this study indicated that when we find out of one of these two symptoms in nurses we should suspect they also have the other one.

「A Study on Work-Family Balance and Stressors among Japanese Administrative Nurses」

Authors: Mizuno M, Yamada Y, Hirokawa M, Sugiura M, Nishi Y, Kawata Y, Tanaka S

The Proceedings of the 3rd International Symposium on Work Ability, CD-ROM (Hotel Nikko Hanoi)

The purpose of this study is to clarify the work and family balance among administrative class nurses. As the results, it was clarified that the respondents of nurses from university hospitals had difficulty in balancing work and family due to various stressors.

「Relation between Typus Melancholicus and Burnout Syndrome among Japanese Nurses」

Authors: Yamada Y, Hirokawa M, Miyuki S, Nishi Y, Tanaka S, Mizuno M

The Proceedings of the 3rd International Symposium on Work Ability, CD-ROM (Hotel Nikko Hanoi)

The purpose of this study is to elucidate some types of burnout in measured burnout. In conclusions, we should not regard measured burnout as TM burnout simply. There are at least four types of burnout contained in measured burnout. Clarifying the mechanisms of every type of burnout will be necessary from now on. Furthermore, it is a future problem to develop the viewpoint to apply to the industrial scene.

「Relationship between Depression and Depersonalization among Japanese Nurses」

Authors: Tanaka S, Miyuki S, Hirokawa M, Yamada Y, Nishi Y, Mizuno M

The Proceedings of the 3rd International Symposium on Work Ability, CD-ROM (Hotel Nikko Hanoi)

The purpose of this study was to clarify the relationship between depression and depersonalization. As the results, two symptoms overlapped by each other. Therefore, when we observe these two symptoms in nurses we should suspect they may also have the other one.

「Relationship between Depersonalization Syndrome and Medical Malpractice among Japanese Nurses」

Authors: Miyuki S, Hirokawa M, Yamada Y, Nishi Y, Tanaka S, Mizuno M

The Proceedings of the 3rd International Symposium on Work Ability, CD-ROM (Hotel Nikko Hanoi)

The purpose of this study was to investigate the possible relationship between depersonalization syndrome and medical malpractice. As the results, it was proved that depersonalization syndrome is one of the causative factors of med-

ical incidents.

「Effect of Continuous Exercise on Job Stress among Japanese Nurses」

Authors: Kawata Y, Yamada Y, Miyuki S, Nishi Y, Mizuno M, Hirose M, Tanaka S

The Proceedings of the 3rd International Symposium on Work Ability, CD-ROM (Hotel Nikko Hanoi)

This study verifies the effect of continuous exercise on perception of job stressors and on influence of job stressors toward the stress response. In this study, the results of analysis indicated that continuous exercise has a modifying effect toward job stress among Japanese nurses.

「Effect of Obsessive Personality Trait and Impulsiveness on Obsessive-Compulsive Disorder and Eating Disorder among Hospital Nurses」

Authors: Nishi Y, Hirose M, Sugiura M, Yamada Y, Tanaka S, Mizuno M

The Proceedings of the 3rd International Symposium on Work Ability, CD-ROM (Hotel Nikko Hanoi)

The purpose of this study is to clarify the relation between Obsessive-Compulsive Disorder and Eating Disorder among Hospital Nurses. The results of this study indicated that obsessive-compulsive disorder in hospital nurses is still one context for an obsessive personality, and eating disorder is not necessarily predicated upon an obsessive personality.

「Comparison of Affective Temperament between Sports University Athlete and Non-Athlete Using TEMPS-A」

Authors: Yamada Y, Sugiura M, Nishi Y, Ueno T, Mizuno M, Tanaka S, Hirose M

The Proceedings of Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science 2007, p. 127 (Hiroshima University)

This study aims to clarify the features of athletes' affective temperaments through the comparison with non-sports university students. Athletes (especially, male athletes) didn't have affective temperaments except hyperthymic compared with non-athletes. However, their affective temperaments well connected to depression symptom than non-athletes' one.

「Effect of Psychological Stressors on Depression among Japanese Sports University Freshmen」

Authors: Kawata Y, Yamada Y, Sugiura M, Hirose M, Mizuno M

The Proceedings of Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science 2007, p. 130 (Hiroshima University)

The purpose of this study is to examine the structure of the stressor relating daily life and competitive life in the athletic university freshmen. As the results, the psychological stressors among the sports university freshmen were overlapped with subscale of the mid-career crisis in the athlete career.

「交替制勤務に従事する女性看護師と配偶者のワークファミリー・バランスに関する研究」

研究者：水野有希・松田文子・水野基樹・山田泰行・小泉智恵・酒井一博

日本人間工学会誌第43巻2号，平成19年5月，xiii頁。

働く女性の増加に伴い，仕事と家庭の両立支援が急務となっている。とりわけ交代性勤務に従事する女性看護師の場合，家庭と仕事の両立は困難であり，ストレスを抱えがちである。本研究は女性看護師とその配偶者のワークファミリーバランスの実体を明らかにすることで，今後の両立支援に役立てることを目的とした。

「看護師の職務ストレスと抑うつとの関連：キャリア区分からの検討」

研究者：杉浦 幸・山田泰行・水野基樹・田中純夫・広沢正孝

人類労働学会会報，第86号，平成19年6月，30頁。

本研究は，看護師のキャリア区分として若手，中堅，管理職の3群を設定し，3群間で職務ストレスに関する心理テストの比較を行った。その結果，管理職が最も高い職務ストレスを抱えており，また若手は職務ストレスの構造化もなされていないままに職務に追われていることが明らかになった。

「看護師のメランコリー親和型性格とストレス・コーピングの関連」

研究者：山田泰行・杉浦 幸・水野基樹・田中純夫・広沢正孝

人類労働学会会報，第86号，平成19年6月，31頁。

本研究は，メランコリー親和型性格が看護師が職務ス

トレス状況下において用いるコーピング・ストラテジーの決定に影響力をもつか否かを検証した。その結果、TMを構成する課題への完璧性と他者への献身の優劣によって、看護師が職務ストレスに対して用いるコーピングの種類が異なることが明らかになった。

「大学生アスリートにおける攻撃性と逸脱行動Ⅰ」

研究者：田中純夫・山田泰行・杉浦 幸・西 泰信・水野基樹

日本教育心理学会第49回総会プログラム，平成19年9月，51頁。

大学生アスリートの逸脱行動の報道がマスコミによって報告される昨今，スポーツの功罪が再検討される風潮が高まりつつある。本研究は本当に大学生アスリートの逸脱行動が一般大学生に比べて顕著なのか否かを検証した。その結果，大学生アスリートのほうが攻撃性が高かったものの，実際の逸脱行動の頻度は一般大学生の方が高いという結果が得られた。

「大学生アスリートにおける攻撃性と逸脱行動Ⅱ—アスリート内での比較から—」

研究者：杉浦 幸・山田泰行・水野基樹・広沢正孝・田中純夫

日本教育心理学会第49回総会プログラム，平成19年9月，51頁。

本研究はアスリートの中でも逸脱行動を頻繁に起こすものと起こさないものがあることを疑問視し，それぞれのどのような性格の違いが認められるのかを検証した。そこで着目したのが攻撃性と組織風土の概念である。その結果，ある攻撃性を持った者が特殊な部活動の組織風土に身を置いたとき，逸脱行動が生じやすいことが明らかになった。

「大学生アスリートの抑うつと関連するストレス—性差・競技特性という視点から—」

研究者：杉浦 幸・山田泰行・上野朋子・水野基樹・広沢正孝

日本体育学会第58回大会予稿集，平成19年9月，173頁

大学生アスリートの競技ストレスに介入する上で，集団を対象としたマクロ的視点からの介入は初期において有効な手段といえる。そのための有益な知見を得ることを目的として，大学生アスリートの抑うつと関連するストレスを性差と競技特性という視点から検討した。

「大学生アスリートのキャリア・トランジションと心理的ストレスに関する研究（Ⅰ）—アスリート・キャリア発達段階モデルの作成—」

研究者：山田泰行・川田裕次郎・広沢正孝・水野基樹

日本体育学会第58回大会予稿集，平成19年9月，174頁。

シャインの内的キャリア発達段階を基盤に，アスリート・キャリアとそれに伴うストレスおよびキャリア・トランジションの契機を発達の視点から捉えることのできるモデルを作成した。それぞれの発達段階で生起する課題やストレスなどを詳細に記載した。

「大学生アスリートのキャリア・トランジションと心理的ストレスに関する研究（Ⅱ）—アスリート・キャリア発達段階モデルにおける中期キャリア危機の実証—」

研究者：川田裕次郎・山田泰行・杉浦 幸・広沢正孝・水野基樹

日本体育学会第58回大会予稿集，平成19年9月，174頁。

アスリート・キャリア発達段階モデルにおいて主要なストレスに位置づけられる中期キャリア危機に焦点を当て，大学生アスリートが大学入学時にどの程度この状態にあるのかを検証した。その結果，入学直後の3ヶ月の間ですでに中期キャリア危機に関連のあるストレスが抑うつに対して説明力を有することが明らかになった。

「大学生アスリートのキャリア・トランジションと心理的ストレスに関する研究（Ⅲ）—セカンドキャリア事例のPlanned Happenstance Theoryによる経営学的解釈—」

研究者：水野基樹・山田泰行・川田裕次郎・広沢正孝

日本体育学会第58回大会予稿集，平成19年9月，175頁。

大卒Vリーガー3名に面接を行い，アスリート・キャリアからビジネス・キャリアへの適応過程を心理的ストレスとの関連から検討した。その結果，正規社員としての採用だとしても新たな職種の間 mismatchesが生じること，Planned Happenstance Theoryのロジックに適合する選手は引退後のキャリアが比較的順調であること，といった結論が得られた。

「スポーツ選手のキャリア・トランジションとストレス」

企画者・司会：水野基樹，シンポジスト：小川千里・高畑好秀・広沢正孝

日本スポーツ心理学会第34回大会研究発表抄録集, 平成19年12月, 10-11頁.

スポーツ選手が経験するキャリア・トランジションと、それに伴うストレスに関する心理メカニズムの動態を、産業・組織心理学(経営学)・メンタルトレーニング(スポーツ心理学)・精神保健学(医学)という3領域から、スポーツ選手のキャリア・トランジションに前後で経験するストレスの内容や種類およびコーピング戦略に対してシンポジウムにおいて検討した。

「スポーツ選手のキャリア発達とメンタリング機能に関する研究」

研究者：水野基樹・杉浦 幸・富田麻由美

日本スポーツ心理学会第34回大会研究発表抄録集, 平成19年12月, 194-195頁.

大学生現役スポーツ選手を対象に、スポーツ選手としてのキャリア発達期におけるメンタリング機能に関する調査を実施し、彼らのより豊かな競技生活のための支援関係のあり方について明らかにした。その結果、大学生スポーツ選手の支援関係のあり方は、身近に関係形成が可能なピア関係が多いことが推測された。メンタリングの受容度には、個人競技・集団競技の差や性差が見られたことから、効果的なメンタリングはきわめて状況依存的であることが明らかになった。

「大学生スポーツ競技者の発達におけるメンターがバーンアウトに及ぼす影響」

研究者：五十嵐辰也・杉浦 幸・水野基樹・中島宣行・岩田真一・富田麻由美

日本スポーツ心理学会第34回大会研究発表抄録集, 平成19年12月, 232-233頁.

大学生スポーツ競技者のもつメンターがバーンアウトに及ぼす影響を発達の視点から検討した。その結果、大学1・2年生では、高校指導者をメンターと認知していることが、4年生では大学指導者をメンターと認知していることがバーンアウト抑制に効果的であることが示された。また、大学でのチームメイトをメンターと認知している者のバーンアウト得点は学年を問わず比較的低かった。この結果、大学入学後、徐々に大学指導者や大学でのチームメイトをメンターとして獲得していくことが、バーンアウトを抑制する可能性があると考えられた。

【報告書】

「児童生徒の対人攻撃行動における認知・自我構造の把握と対人適応促進技法の開発」

日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C(2)課題番号16530458研究成果報告書, 平成19年3月.

代表研究者：田中純夫

協力研究者：川田裕次郎・菊地奈美・今野 亮・杉浦幸・中島宣行・水野基樹・山田泰行

本報告書は、学校教育現場における児童生徒を対象として、現代の青少年の問題行動の中心をなす対人場面での不適応(特に対人攻撃行動や回避行動)における認知や感情などの諸特徴を分析して自我の機能的側面を浮き彫りにし、教育効果を高めるための個や集団に対する適応指導形態模索することを目指したものである。研究1では対人攻撃行動の要因が構造化され、研究2において対人適応を向上させる適応指導のプログラムが作成された。

木藤 友規

〈論文〉

運動感覚の知覚と大脳皮質内処理に関する研究, 木藤友規, 順天堂大学大学院博士学位論文, 2007年3月

振動刺激による動作錯覚の残効現象の知覚特性を明らかにし、さらに電気生理学的手法によって動作知覚処理中の1次運動皮質活動を示した。

Human limb-specific and non-limb-specific brain representations during kinesthetic illusory movements of the upper and lower extremities, Naito E, Nakashima T, Kito T, Aramaki Y, Okada T, Sadato N, Eur. J. Neurosci. 25: 3476-3487, 2007.

運動感覚錯覚法と機能的磁気共鳴画像法を用いて、四肢の運動感覚処理に関わる脳内再現を明らかにした。

〈学会発表〉

前腕姿勢の違いによる手関節協働筋伸長反射活動, 井桁良平, 木藤友規, 遠藤隆志, 米田継武, 第15回日本運動生理学会大会, 2007年7月, 弘前

異なる前腕姿勢における協働筋の伸張反射活動の変調特性を報告した。

両手協調動作時のタイミング判断における感覚情報の寄与, 木藤友規, 米田継武, 第37回日本臨床神経生理学

会学術大会, 2007年11月, 宇都宮

両手動作の時間判断特性から, 左右別々の脳半球に到達する感覚情報の統合機構について検討した.

Stretch reflex activities of wrist flexor synergist during pronation and supination, Igeta R, Kito T, Okawa Y, Ogata K, Endoh T, Yoneda T, Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science 2007, 2007年12月, Hiroshima, Japan.

協働筋の反射活動を制御する中枢神経系の階層的处理について検討した.

青木 和浩

〈学術論文〉

大学男子跳躍選手における競技パフォーマンスとテストバッテリーの関連 著者: 青木和浩, 河村剛光, 中丸信吾, 越川一紀, 吉儀 宏. 陸上競技学会誌 5(1): 12~18, 2007. 3

大学男子跳躍選手の競技パフォーマンスとコントロールテストの関連について重回帰分析を用いて検討した. 競技パフォーマンスの予測に選定されたテスト項目は脚伸展パワー・脚筋力などであった.

大学男子短距離走者におけるスプリントバウンディング及びバウンディング運動のトレーニング効果について 著者: 米津 毎, 青木和浩, 佐久間和彦, 越川一紀, 金子今朝秋 陸上競技研究 69: 22~29, 2007. 6

大学男子短距離走者を対象として, スプリントバウンディングとバウンディングのトレーニング効果について検討をした. その結果, 各バウンディングにおいて100 m 走の各局面における効果が異なることが明らかになった.

ボールを追従視するトレーニングが中学野球選手の動体視力及び打撃能力に及ぼす影響 著者: 河村剛光, 青木和浩, 吉儀 宏, 櫻庭景植, 中丸信吾. トレーニング科学 19(4): 361~367, 2007. 12

ボールを追従視するトレーニングが中学野球選手の動体視力及び打撃能力に及ぼす影響について検討した. その結果, DVA 動体視力の向上, バントテストのスコアが有意に改善された.

大学跳躍選手におけるバウンディング能力と体力の関係およびその性差 著者: 青木和浩, 河村剛光, 越川一紀, 吉儀 宏 陸上競技研究 71: 10~15, 2007. 12

大学男女跳躍選手を対象として, 各バウンディング能力と体力の関係とその性差について検討した. その結果, 各バウンディング能力と体力との関連性には性差により特性が異なることが明らかになった.

走幅跳における選手の自己観察内容とコーチの他者観察内容の関係に関する研究 著者: 青山清英, 越川一紀, 青木和浩, 森長正樹, 吉田孝久, 尾縣 貢. 陸上競技研究 71: 16~28, 2007. 12

走幅跳選手を対象に選手の遂行した当該試技に関する選手とコーチの直後情報の内容とその関連性に検討を行った. その結果, 選手とコーチの当該試技に対する成功・失敗の一致度は失敗試技の方が顕著に高かった.

〈学会発表〉

記録用紙の交換による筋力トレーニングの運動処方女子学生の身体意識や生活習慣に変化をもたらすか? 池畑亜由美, 中丸信吾, 青木和浩, 木村博人. 東京体育学研究2006年度報告: 2007. 3

記録用紙の交換による運動処方で行った筋力トレーニングが女子学生の形態及び体力に与える影響: 中丸信吾, 池畑亜由美, 青木和浩, 木村博人. 東京体育学研究2006年度報告: 2007. 3

戦術行動立案の前提としてのコーチの他者観察内容と選手の自己観察内容の対応性—走幅跳の場合—: 青山清英, 越川一紀, 青木和浩, 森長正樹, 吉田孝久, 尾縣 貢. スポーツ方法学会第18回大会: 2007. 3

上級走幅跳選手におけるパフォーマンスに影響を与える質的要因と量的要因—自己観察内容とバイオメカニクスの分析内容から—: 青山清英, 越川一紀, 青木和浩, 森長正樹, 吉田孝久, 尾縣 貢. 陸上競技学会第6回大会: 2007. 8

投擲競技者を対象としたウエイトトレーニング後のWGH摂取の検討: 青木和浩, 高梨雄太, 鯉川なつえ, 鈴木良雄, 金子今朝秋, 澤木啓祐. 陸上競技学会第6回大会: 2007. 8

動体視力の発達に関する研究：河村剛光，青木和浩，吉儀 宏，櫻庭景植，戸塚涼子，本田和寛．スポーツビジョン研究会第14回大会：2007. 9

陸上競技跳躍選手における視機能と踏切に関する研究：青木和浩，河村剛光，中丸信吾，吉儀 宏，越川一紀．スポーツビジョン研究会第14回大会：2007. 9

サッカー・バレーにおける運動後の WGH 摂取の効果：青木和浩，鯉川なつえ，鈴木良雄，吉儀 宏，長岡功，澤木啓祐．日本臨床スポーツ医学会第18回学術集会：2007. 11

土屋 基

健康寿命を見据えての若年女性における冷え性の実態と生活習慣の検討 ～第1報～：

土屋 基，樋口和洋，井上忠夫，鈴木勝彦，民族衛生，73 (付録)：110-111 (2007. 11)

若年女性の「冷え性」と生活背景の関連を検討する一連の研究の中で，今回は女子中学生2119名，女子高校生2416名，女子大学生1578名の計6113名を対象に「冷え性」と生活習慣，身体面及び精神面の愁訴等の関連について検討した。

平成18年度体力・生活習慣病分析報告書：

土屋 基，平成18年度市川市ヘルシースクール報告書：市川市教育委員会 (2007. 3)

小学生2704名と中学生1770名，合計4474名を対象に行なった身体測定，新体力テスト，血液検査，ライフスタイル調査に基づきデータ分析を行い報告した。

手軽にできる運動・遊び：

土屋 基，平成18年度 市川市の体育 NO. 23, 72～79，市川市教育委員会 (2007. 3)

小中学校の指導者向けに，児童及び生徒が一人あるいは集団で手軽にできる運動遊び15種目を紹介すると共に，一人で出来るトレーニング，親子で出来るトレーニング等紹介し，その指導のポイントを解説した。

成長発達段階に応じた適切な運動指導：

土屋 基，ニューズレター千葉，第45号，6，(2007. 3)

乳幼児から高齢者に至るまでの運動指導の進め方のポ

イントを各年齢段階別に解説した。

伸張性運動による筋損傷が中枢性および抹消性疲労の発現に及ぼす影響：

遠藤隆志，米田継武，佐賀典生，土屋 基，笹田周作，第15回日本運動生理学会大会抄録集，53 (2007. 7)

“米田継武”の項参照

野川 春夫

学術論文

1. 「グローバル化時代におけるスポーツと社会同化」

共同研究者：伊藤央二

第58回日本体育学会，体育社会学専門分科会発表論文集，18-23，2007年。

2. 「地域スポーツクラブへの継続的な参加に関する研究～資源交換理論を援用して～」

共同研究者：岡安 功

第58回日本体育学会，体育社会学専門分科会発表論文集，106-110，2007年。

3. 「スポーツ参加行動を説明するホスピタリティ概念導入の可能性」

共同研究者：宮崎朋子

第58回日本体育学会，体育社会学専門分科会発表論文集，157-162，2007年。

4. 「総合型地域スポーツクラブのソーシャルキャピタルに関する研究～中高年世代に注目して～」

共同研究者：河原行雄

第58回日本体育学会，体育社会学専門分科会発表論文集，179-184，2007年。

5. 「生涯スポーツイベントの参加行動をどのように説明するのか？」

共同研究者：岡 安功

Leisure & Recreation (自由時間研究)，第30号，3-13，2007年。

6. 「ゴルフギャラリーの来場要因に関する研究～性差に注目して～」

共同研究者：渡辺泰弘，松本耕二，佐藤文宏

Leisure & Recreation (自由時間研究), 第30号, 65-73, 2007年.

その他

1. 「スポーツ施設のマネジメント」 体育施設運営士養成講習会テキスト (財)日本体育施設協会編, 2007年1月.

2. 「スポーツマーケティング」 体育施設管理士養成講習会テキスト (財)日本体育施設協会編, 2007年6月.

3. 「スポーツマーケティング」 体育施設管理士養成講習会テキスト (財)日本体育施設協会編, 2007年7月.

4. 「スポーツマーケティング」 体育施設管理士養成講習会テキスト (財)日本体育施設協会編, 2007年11月.

4. 自由時間研究

6. 自由時間研究

国際会議「Meeting of Asian Sports Ministers」(役職: ラプラトゥール)

アジア地域スポーツ関係大臣級会合」

文部科学省主催, 大阪市迎賓館, 2007年8月27日

口頭発表

1. 「グローバル化時代におけるスポーツと社会同化」

発表者: 伊藤央二・野川春夫

第58回日本体育学会, 神戸大学, 2007年9月5日.

2. 地域スポーツクラブへの継続的な参加に関する研究 ～資源交換理論を援用して～

発表者: 岡安 功・野川春夫

第58回日本体育学会, 神戸大学, 2007年9月5日.

3. 「公共スポーツ施設におけるサービス・クオリティ 尺度試案～指定管理者制度に着目して～」

発表者: 佐藤剛史・野川春夫

第58回日本体育学会, 神戸大学, 2007年9月5日.

4. 「ゴルフギャラリー来場モデルの検討」

発表者: 渡辺泰弘・野川春夫

第58回日本体育学会, 神戸大学, 2007年9月6日.

5. 「参加型スポーツイベントの滞留モデルの構築～団塊世代に着目して～」

発表者: 市川朋香・太田あや子・野川春夫

第58回日本体育学会, 神戸大学, 2007年9月6日.

6. 「日本と中国におけるプロサッカーリーグ経営の比較～JリーグとCリーグの運営, 収支, 組織, 戦略の比較」

発表者: 谷 宇・二宮浩彰・野川春夫

第58回日本体育学会, 神戸大学, 2007年9月6日.

7. 「スポーツ参加行動を説明するホスピタリティ概念導入の可能性」

発表者: 宮崎朋子・野川春夫

第58回日本体育学会, 神戸大学, 2007年9月7日.

8. 「総合型地域スポーツクラブのソーシャルキャピタルに関する研究～中高年世代に注目して～」

発表者: 河原行雄・野川春夫

第58回日本体育学会, 神戸大学, 2007年9月7日.

9. 「運動部活動と地域スポーツクラブの連携に関する研究」

発表者: 池上純夫・野川春夫

第58回日本体育学会, 神戸大学, 2007年9月7日.

10. 「運動部活動と地域スポーツクラブの連携に関する研究」

発表者: 池上純夫・野川春夫

第9回日本生涯スポーツ学会, 北翔大学, 2007年9月22日

11. 「グローバル化時代におけるスポーツと社会同化～日系ブラジル人対象の柔道教室～」

発表者: 伊藤央二・野川春夫

第9回日本生涯スポーツ学会, 北翔大学, 2007年9月22日

12. 「公共スポーツ施設のサービス・クオリティに関する研究～指定管理者制度に着目して～」

発表者: 佐藤剛史・野川春夫

第9回日本生涯スポーツ学会, 北翔大学, 2007年9月22日

13. 「総合型地域スポーツクラブのソーシャルキャピタルの研究」

発表者：河原行雄・野川春夫

第9回日本生涯スポーツ学会，北翔大学，2007年9月22日

14. 「総合型地域スポーツクラブにおける評価システムの構築にむけた試案」

発表者：舟木泰世・野川春夫

第9回日本生涯スポーツ学会，北翔大学，2007年9月22日

15. 「指定管理者制度を導入した公共スポーツ施設における女性利用者の顧客満足度～施設種類別の分析～」

発表者：宮崎朋子・高橋季絵・野川春夫

第9回日本生涯スポーツ学会，北翔大学，2007年9月21日

16. 「資源交換理論を援用しての地域スポーツクラブへの継続的な参加に関する研究～実践者へのインタビュー調査をもとに～」

発表者：岡安 功・野川春夫

第9回日本生涯スポーツ学会，北翔大学，2007年9月21日

17. 「広域スポーツセンターの機能と役割」

発表者：渡辺泰弘・松本耕二・野川春夫

第9回日本生涯スポーツ学会，北翔大学，2007年9月21日

18. 「日・中サッカー選手育成システムに関する比較研究」

発表者：谷 宇・二宮浩彰・野川春夫

第9回日本生涯スポーツ学会，北翔大学，2007年9月21日

19. 「Where is the Hospitality Culture of Sport Consumers in Japan?」

発表者：宮崎朋子・野川春夫

4th World Congress of Sociology of Sport, デンマーク・コペンハーゲン市

20. 「Global Sports Event and Transformation of the

City」

発表者：高橋季絵・野川春夫

4th World Congress of Sociology of Sport, デンマーク・コペンハーゲン市

21. 「Current Issues of Mega Sport Events」

発表者：野川春夫

4th World Congress of Sociology of Sport, デンマーク・コペンハーゲン市

22. 「New Dimension of Sport Participation among Japanese Baby-Boomers」

発表者：市川朋香・野川春夫

2007北米スポーツ社会学学会 (North American Society for the Sociology of Sport), 米国・ピッツバーグ市, 2007年11月3日

23. 「Roles and Functions of a Martial Arts School for Japanese Brazilians in Japan」

発表者：伊藤央二・野川春夫

2007北米スポーツ社会学学会 (North American Society for the Sociology of Sport), 米国・ピッツバーグ市, 2007年11月3日

24. 「Last Samurai in the Contemporary Japanese Society: On the Verge of Diminishing Bushido Spirits in Japanese Sport Culture」

発表者：野川春夫・宮崎朋子

2007北米スポーツ社会学学会 (North American Society for the Sociology of Sport), 米国・ピッツバーグ市, 2007年11月3日

廣津 信義

論文

Calculating the probabilities of winning the Asian qualifiers for 2006 FIFA world cup. M. Suzuki, S. Osaki, N. Hirotsu. *In Recent Advances in Stochastic Operations Research*, (T. Dohi, S. Osaki and K. Sawaki, eds.) Singapore: World Scientific, 297-307.

強いチームが必ず勝つという前提で、弱いチームがくじ運だけでワールドカップアジア予選をどれだけ勝ち抜くことができるか、その確率を計算した。

リレー競技の走者の選定に関する数理的な手法. 廣津信義, 奥野 浩. 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 11, 1-9.

リレー競技の走者配置策について, 選手のタイムのばらつきを考慮した数学モデルを用い確率計算することで, 目標タイムを達成するための最適な配置の策定方法を提案した.

国際学会発表

A DEA approach to an evaluation of soccer players — An application of distance-minimized model—. N. Hirotsu, T. Ueda. DEA (Data Envelopment Analysis) Symposium 2007 (Osaka). 平成19年2月19日. Proceedings of DEA Symposium 2007, 67-70 (2007).

A method for analyzing tactics in the phase of reception attack in volleyball using game theory. N. Hirotsu, M. Ito, C. Miyaji, M. Hamano, A. Taguchi. 6th International Association of Computer Science in Sport (Calgary). 平成19年6月4日. Proceedings of the International Symposium on Computer Science in Sport, 44-51 (2007).

An evaluation of performance of football players using DEA models. N. Hirotsu, T. Ueda. First International Conference on Mathematics in Sport (Manchester). 平成19年6月26日. Proceedings of IMA Sport 2007, 97-102 (2007).

国内学会発表

リレーチームにおける選手の選抜・配置の方法. 廣津信義, 奥野 浩. 2007年日本OR学会春季研究発表会(鳥取). 平成19年3月29日. 2007年日本OR学会春季研究発表会アブストラクト集, 112-113 (2007).

経営効率分析法 (DEA) を利用した野球チームのラインナップ選定のための一手法 —北京五輪野球日本代表選手を例として—. 廣津信義. 日本体育学会58回大会(神戸). 平成19年9月5日. 予稿集, 281 (2007).

野球チームのラインナップ選定のためのDEAの適用の試み. 廣津信義, 上田 徹. 2007年日本OR学会秋季研究発表会(東京). 平成19年9月28日. 2007年日本

OR学会秋季研究発表会アブストラクト集, 152-153 (2007).

その他

書評「オペレーションズ・マネジメント」. 廣津信義. オペレーションズ・リサーチ, 52(3), 161.

鈴木 大地

【著書】

体力とはなにか—運動処方その前に— 2007/3/22 ナップ 長澤純一, 松井健, 鈴木大地ら. 「水泳競技者の体力」を担当した.

【論文】

10 km オープンウォータースイミングの生理学的特性—OWSの心拍数を中心に 2007/6/12 財団法人日本オリンピック委員会/日本ココアスポーツ科学基金 2006年度研究報告書 pp 36-42. 鈴木大地, 青木純一郎, 綾部誠也, 池畑亜由美, 宮坂裕也

大学競泳選手におけるスタビライゼーション能力と競泳競技との関連性 2007/9/1 トレーニング科学第19巻第3号 pp 275-281 綾部誠也, 佐藤和樹, 小林生海, 鈴木大地, 形本静夫, 内藤久士

大学競泳選手を対象にスタビライゼーション能力と競技特性および競技成績との関連性を明らかにする目的で行い, 競技成績の高い選手は, 伏臥位でのスタビライゼーション能力が高いことが明らかになった.

タイ国駐在邦人の運動習慣とストレス 2007年12月22日 松葉 剛, 鈴木大地, 稲葉 裕 順天堂医学 pp 581-587 vol. 53 2007タイ国への駐在は運動習慣を身につけることに前向きに作用していること, 同国駐在邦人の健康な生活を規定する要因として居住環境や社会的階層などの環境因子の影響が大きいこと, 運動, 栄養, ストレスの中では運動が健康な生活へ及ぼす影響が大きいことが明らかになった.

BODY TEMPERATURE RESPONSES TO OPEN-WATER SWIMMING. Ayabe M, Suzuki D, Kobayashi I, Aoki J. International Journal of Sports Medicine (査読中)

オープンウォーター水泳の競技記録と有酸素性作業能の関係。小林生海, 綾部誠也, 鈴木大地, 内藤久士, 青木純一郎. 体力科学 (査読中)

鯉川なつえ

続発性無月経状態にある長距離ランナーのエストロゲン分泌動態および積極的治療に関する基礎的研究: 鯉川なつえ, 宮崎亮一郎, 陸上競技研究 68(1): 22-27, 2007. 3

正常月経と無月経の女子長距離ランナーを対象にピル投与によるホルモン動態を調査した結果, 無月経群は正常月経群に比べ明らかに E2 が低く, ピル投与により一時的に E2 および P の分泌が高まり, 無月経ランナーへのピル投与は効果的である可能性を示唆した。

長距離ランナーの高地トレーニングにおける高濃度酸素水摂取の効果: 安養寺俊隆, 鯉川なつえ, 仲村 明, 吉 儀宏, 澤木啓祐, 陸上競技研究 69(2): 30-37, 2007. 5

女子長距離ランナーを対象に, 高地トレーニング期間中に継続的に高濃度酸素水を摂取させた結果, 血中に酸素が溶解され, 高強度のトレーニング時ほど Spo2 の回復に効果があり, 日々のトレーニングによる血中酸素負債を予防する可能性が示唆された。

(学会発表)

投擲競技者を対象としたウエイトトレーニング後の WGH 摂取の検討: 青木和浩, 高梨雄太, 鯉川なつえ, 鈴木良雄, 金子今朝秋, 澤木啓祐, 陸上競技学会第 6 回大会: 27, 2007. 8

青木の項参照

日米の女性陸上競技者における月経に関する調査研究: 鯉川なつえ, 宮崎亮一郎, 陸上競技学会第 6 回大会: 28, 2007. 8

アメリカと日本の女性陸上競技者の月経に関する現状を比較検討した結果, 月経が停止した経験のある人は, アメリカに比べ日本のアスリートの方が有意に多く, ピルについての経験や知識はアメリカのアスリートの方が有意に多かったが, 競技活動に有効に利用されていない現状がうかがわれた。

陸上競技における「スポーツ貧血」の現状と対策: 鯉川なつえ, 日本臨床スポーツ医学会誌 15(4): 101, 2007. 11

陸上競技におけるスポーツ貧血のほとんどは「溶血性貧血」であり, 跳躍選手および長距離選手は短距離選手と比較して有意に Hb, Hct, ハプトグロビンが低値を示したことから, トレーニングの期分け, 食事内容およびサプリメントの活用を十分に考慮することが必要と考えられた。

サッカー・バレーにおける運動後の WGH 摂取の効果: 青木和浩, 鯉川なつえ, 鈴木良雄, 吉 儀宏, 長岡功, 澤木啓祐, 日本臨床スポーツ医学会誌 15(4): 175, 2007. 11

青木の項参照

女子長距離ランナーにおける練習状況, 体調および疲労性骨障害が骨塩量および骨代謝マーカーに与える影響: 石川拓次, 桜庭景植, 丸山麻子, 鯉川なつえ, 澤木啓祐, 日本臨床スポーツ医学会誌 15(4): 212, 2007. 11
石川の項参照

(研究資料)

アスリートの視機能と筋肉疲労回復に及ぼす効果: 鯉川なつえ, Food Style 21, 11(7): 22-24, 2007. 7

アスタキサンチンの継続摂取による, 視機能および慢性的な筋肉疲労の改善効果について解説した。

廣瀬 伸良

(国際シンポジウム)

Grappling with *Trichophyton tonsurans* infection among judo players by All Judo Federation

Nobuyoshi Hirose, Taisuke Tomatsu, Tadashi Murota, Kunio Ebine

Medical Committee of All Japan Judo Federation
International Judo Symposium-Medical and Scientific Aspect-. 10-11: 2007

In Japan, 7 years have passed since the prevalence of *T. tonsurans* infection increased. Under such situations, the description “the duty for the treatment for *Trichophyton tonsurans* infection” was included in the outlines for all competitions prepared by the All Japan Judo Federation in Sep-

tember 2007. Since it is clear that judo competitions may promote the prevalence of the infection due to its sports characteristics, it is necessary and requisite to inform the participants and their instructors about the treatment and prevention of the infection and to provide the guidance for implementation of such treatment and prevention.

***Trichophyton tonsurans* infection among Judo player who participated in the National Junior High School Judo Tournament**

Nobuyoshi Hirose, Morio Suganami, Yumi Shiraki, Masataro Hiruma, Shigaku Ikeda
International Judo Symposium-Medical and Scientific Aspect-. 12-13: 2007

We conducted an epidemiological study of *T. tonsurans* infection among students who participated in national junior high school Judo tournament. Of 1039 tournament participants invited to undergo screening, 496 consented, and 45 participants (9.1%) were found to be positive by hair-brush culture. We found the risk factor for *T. tonsurans* infection were as follows: 1) male, 2) Frequent judo practice at either a high school or judo club. 3) presence of tinea corporis in practice partner, 4) history of tinea corporis 5) players in lower-weight categories. We considered appropriate measures should be taken immediately to prevent more severe outbreaks of this disease.

Questionnaire survey for *Trichophyton tonsurans* infection in judo clubs registered in the All Japan Judo Federation

Nobuyoshi Hirose, Morio Suganami, Yumi Shiraki, Masataro Hiruma, Shigaku Ikeda, Taisuke Toamtsu, Tadashi Murota, Kunio Ebine
International Judo Symposium-Medical and Scientific Aspect-. 14-15: 2007

We performed a questionnaire survey on *T. tonsurans* infection for all leaders of the 10097 judo clubs registered in the All Japan Judo Federation, and obtained 1199 (11.9%) effective answers. In the results, approx. 25% of the managers of judo clubs at junior high schools and elementary schools responded that they did not know about the infection, suggesting that the enlightening activity for the infection has not been performed sufficiently. In addition, the as-

sociations that had experience with the infection accounted for 30.9% of the total, and 14.4% of judo clubs at elementary schools had such experience. There were many associations that performed no preventive measures, even when they had information about the infection.

(学会発表)

大学柔道選手の競技内容と心理的因子の関連性

廣瀬伸良, 前川直也, 緒方和男, 江田茂行, 菅波盛雄, 渡辺直勇, 渡辺涼子, 鈴木貴士, 坂本道人, 金丸雄介:
新潟県体育学会平成19年度大会研究発表抄録: 2007

2001年2月から2001年6月に心理的競技能力診断検査(DIPCA)および体協競技意欲検査(TSMI)を, 全日本学生柔道連盟に所属する大学柔道選手160名に実施した. DIPCA, TSMIの160名のデータを因子分析した結果, 「挑戦意欲」, 「自制心」, 「戦術行動能力」, 「闘志・勝利意欲」の4因子が抽出された. 競技分析との関連性を検証した結果, 「自制心」と総施技における相関が1%水準で認められた.

高校柔道部員における反動的攻撃性と部活動適応感および心理的成熟度との関連

廣瀬伸良, 山本真己, 田中純夫, 菅波盛雄: 日本スポーツ心理学会 第34回大会号 24: 2007

田中純夫の項 参照

青年期から中年期にかけて剣道が視機能に及ぼす影響
中村 充, 菅波盛雄, 廣瀬伸良: 日本武道学会 第40回大会号 22: 2007

中村 充の項 参照

【雑誌】

全日本学生柔道体重別選手権大会 著者: 廣瀬伸良
講道館編集柔道 第78巻12号: 31-45, 2007

2007年の講道館杯予選を兼ねる全日本学生柔道体重別選手権大会の詳細を報告した. 決勝戦14試合の競技内容については詳細に解説した.

山田 満

〈研究論文〉

2007年箱根駅伝総合優勝の広報効果の研究
A study on the economic effects of winning the 2007 Hakone

Ekiden

本研究は、第83回箱根駅伝における順大の総合優勝に関するテレビと新聞報道量を計測し、広報効果を数量化することを目的とし、総額で58億4700万円の結果を得た。また視聴率、順位、露出量、校名表示回数などの相互の相関関係なども分析した。

順天堂大学スポーツ健康科学研究 第11号 (2007) に〈資料〉として掲載

〈学会発表〉

箱根駅伝総合優勝の広報効果

2007年6月30日に開催された日本スポーツ産業学会スポーツマネジメント分科会にて箱根駅伝総合優勝の広報効果の研究成果を70分にわたってスライドや映像を交えて発表した。

※なお上記研究に関し朝日新聞より取材を受け、2007年9月12日付け朝日新聞スポーツ面の連載記事「スポーツ・フロンティア第5部—大学スポーツ考 (10回シリーズ)」の第1回目の冒頭で研究成果が紹介された。

〈英文ケース・スタディー〉

The Campaign to Introduce the Macintosh—A Case Study on the Comparison of Advertising Strategies between Japan and the United States.

2007年度ETP Japan (EU Executive Training Programme in Japan—欧州企業日本研修プログラム)の広告戦略講座用に執筆、同一商品の日米の広告戦略の違いを2部構成でグループワークを通して学ばせるケース・スタディー。

ETP ジャパンプログラム事務局 (早稲田大学大学院商学研究科) 2007年5月 刊

〈調査・報告書〉

受験生の順天堂大学に関するイメージ調査

広報学生募集委員会の「順大のスクール・ブランディング・プロジェクト」の一環として7,8月のオープンキャンパス, 9月の進学相談会で受験生 (607名回収) を対象に順大へのイメージや期待などを調査・分析し, 11月の委員会で報告。

プロジェクトメンバーは山田のほか鈴木 (大), 廣津准教授。2008年1月現在, 在学生全員を対象とした大学への意識調査, ライバル校分析などを実施中でプロジェクトは今後も継続される予定。

金子 育世

Emotional expressions in L1 and L2 English writing

Ikuyo Kaneko & Michiko M. Sudo The 33rd JALT International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exposition, JALT 2007 Conference Handbook, 100, 2007. 11

The purpose of this study was to observe the similarities and differences between first and second language acquisition in English emotional expressions and to investigate the correlation between the proficiency level of emotional expressions and the English proficiency measured by TOEIC. Two kinds of personal letters written by native speakers of English and Japanese learners were analyzed and compared. They were also evaluated by the ESL Composition Profile developed by Jacobs, et al. (1981).

須藤 路子

Emotional expressions in L1 and L2 English writing

Ikuyo Kaneko & Michiko M. Sudo The 33rd JALT International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exposition, JALT 2007 Conference Handbook, 100, 2007. 11

“金子育世”の項参照

西村 英俊

【報告】

オープンソースソフトウェアによるさくらキャンパス 計算機実習室のシステムの構築

著者：奥野 浩 (順天堂大学), 西村英俊 (順天堂大学) 順天堂大学スポーツ健康科学研究 第11号 64~68

サーバではFreeBSD, Samba, OpenLdap, Squidなどサーバ系ソフトウェアをオープンソースソフトウェアで構築し, クライアント機ではWindows XPのユーザ管理機能を利用し, セキュリティを強化した実習室システムを構築したことを報告した。

【著書】

子どもの体力検定ハンドブック 著者：西嶋尚彦 (筑波大学), 西村英俊 (順天堂大学) ほかに9名 監修：大木昭一郎 (全国体育指導委員連合) 社団法人全国体育

指導委員連合

文部科学省の新体力テストをもとに小学生向けに体力検定を体力指導委員で行うこととなり、テストの方法、点数化及び検定の方法、等活用方法を紹介し、検定を行い、結果を利用する体育指導員用テキストを作成した。

柳田 美子

著書

NEXT 栄養教育論第2版, 講談社サイエンティフィック: 分担執筆, 食行動変容と栄養教育 31-39, 2. 栄養教育に応用できる理論やモデル, 140-143, (2007)

行動科学からみた食行動変容の各モデルの紹介とそのモデルを用いた実践編について担当し、記述したものである。

論文・報告

1) **Leprosy situation in South Sulawesi, Indonesia:** Sri Vitayani MUCHTAR, Yoshiko YANAGIDA, Masumi ENDOH, Yasuko YOGI, 民族衛生 V73(5), 112-117, (2007)

インドネシア スラベシ州におけるハンセン病は、今なお高い有病率を示している。南スラベシ州では27統治区のうち22統治区で平均有病率は2.3/10,000人である。加えて子どものハンセン患者は5%以上である。この地域におけるハンセン病対策は公衆衛生面からの緻密な計画が必要であろう。

2) **ハンドボール選手の栄養と水分摂取—女子ハンドボールチームの実態をとして—**: 柳田美子, 緒方嗣雄, 西山逸成, ハンドボール480号, 財団法人日本ハンドボール協会, 20-21, (2007)

社会人女子ハンドボール選手の練習時における水分摂取は、約3時間で1,250 mlであった。水分摂取が適正であった者は尿たんぱく所見において、翌朝陽性を示す者が少なかった。日常から自分に適した食事や水分摂取量及び方法を把握しておくことが大切である。

学会発表

スポーツ系及び文科系女子の食事摂取状況と月経随伴症状に関する研究—納豆の摂取状況が月経随伴症状に及ぼす影響—: 発表者: 柳田美子, 山田浩平
学校保健研究 V. 49, suppl., 2007

スポーツ系及び文科系女子大学生の月経随伴症状に納豆摂取頻度が如何なる影響を与えるか検討したものである。大学別では月経随伴症状に大きな差は見られず、納豆摂取頻度の少ない者は月経期間中では下腹部痛、下痢、能率の低下がみられた。

細見 修

【学会発表】

1. **Molecular and biological properties of the melibiosamine receptor protein of K562 cell**

O. Hosomi, Y. Misawa, Y. Matahira, A. Takeya, D. Ohmori, S. Kudo

We have isolated the MelNH2 receptor protein from K562 cells and identified that its molecule was hnRNP A1 protein. In this report we examined some gene expressions, for example galectin-3, hnRNP A1 and other genes related to the cell apoptosis, by the method of the RT-PCR. Moreover, we studied locations of hnRNP A1 and galectin-3 proteins in the K562 cells by using labeled-monooclonal antibodies.

我々は、ヒト由来 K562細胞の培養液に MelNH2 を添加することでアポトーシスが誘導されることを明らかにしてきた。また、それには hnRNP A1 蛋白質（ヘテロ核リボ核タンパク質 A1）が深く関与していることも示唆した。

今回、この hnRNP A1 タンパク質遺伝子や、メリビオースに親和性を持つとされるガレクチン-3 タンパク質遺伝子の発現を、カスタムプライマーを設計して調べると共に、それらのタンパク質の K562細胞内における局在を、蛍光標識した特異的抗体を用いて明らかにする。

また、他の数種類の遺伝子発現量を β アクチン遺伝子のそれと比較して、MelNH2 が癌細胞の遺伝子発現に影響を与えるのか否かを明らかにして行く。

2. **Study on the effect of glucosamine yogurt whey to the human skin and the cultured cells**

R. Sugawara, M. Takahashi, K. Shichita, H. Muto, Y. Yamaoka, Y. Misawa, Y. Matahira and O. Hosomi

We have made two types of the yogurt whey by using centrifugation at 10,000 r.p.m. and they are glucosamine added yogurt whey and the non-added one. We have added these two whey to the cultured cells to see an effect of the

proliferation of the cells and a production of collagen.

Also, we have compressed the glucosamine added yogurt whey to the human skin to confirm the effect on the skin moisture by using a moisture meter.

本研究の共同研究者等は、グルコサミン添加ヨーグルトから遠心分離・作成した乳清と、グルコサミンを添加しないヨーグルト乳清及び、単糖やオリゴ糖類(グルコサミン, N-アセチルグルコサミン, N-アセチルラクトサミン, N-アセチルメリビオサミン, アロN-アセチルラクトサミン等)を正常培養細胞(Cell bankより購入したMC-3T3やNHSF-46細胞等)に添加して、細胞の増殖への影響やコラーゲン量の変化等について検証する。

それぞれの細胞は、細胞数を 10^4 /ml台に調整して約0.5 mlを24ウェル(コラーゲンI型コーティング)に分け入れ、さらにオリゴ糖類の溶液(50 mM)を2~5 mM濃度添加した。これらを37度の炭酸ガス(5%)培養器で3~5日間培養し、その後トリプシン処理で細胞を剥離して顕微鏡下でカウントした。

さらに、それぞれの乳清をボランティア10名(20代本学学生)の腕の皮膚に一回/日、25 mlをコットンに含ませ直接塗布して、グルコサミン添加ヨーグルト乳清が皮膚の水分量に与える影響を簡易水分計で測定する。

中村 充

学会発表

青年期から中年期にかけて剣道が視機能に及ぼす影響。中村充, 菅波盛雄, 廣瀬伸良。日本武道学会第40回大会。2007年8月。東京。青年期から中年期にかけて、剣道習慣が視機能に及ぼす影響について検討を行った。8項目の測定により、加齢・剣道習慣・視機能のそれぞれの関連性を明らかにした。

菅波 盛雄

Trichophyton tonsurans infection among Judo player who participated in the National Junior High School Judo Tournament

Nobuyoshi Hirose, Morio Suganami, Yumi Shiraki, Masataro Hiruma, Shigaku Ikeda
International Judo Symposium-Medical and Scientific Aspect? 12-13: 2007

廣瀬伸良の項 参照

Questionnaire survey for *Trichophyton tonsurans* infection in judo clubs registreted in the All Japan Judo Federation

Nobuyoshi Hirose, Morio Suganami, Yumi Shiraki, Masataro Hiruma, Shigaku Ikeda, Taisuke Toamtsu, Tadashi Murota, Kunio Ebine

International Judo Symposium —Medical and Scientific Aspect— 14-15: 2007

廣瀬伸良の項 参照

(学会発表)

大学柔道選手の競技内容と心理的因子の関連性

廣瀬伸良, 前川直也, 緒方和男, 江田茂行, 菅波盛雄, 渡辺直勇, 渡辺涼子, 鈴木貴士, 坂本道人, 金丸雄介: 新潟県体育学会平成19年度大会研究発表抄録: 2007

廣瀬伸良の項 参照

高校柔道部員における反応的攻撃性と部活動適応感および心理的成熟度との関連

廣瀬伸良, 山本真己, 田中純夫, 菅波盛雄: 日本スポーツ心理学会 第34回大会号 24: 2007

田中純夫の項 参照

青年期から中年期にかけて剣道が視機能に及ぼす影響

中村 充, 菅波盛雄, 廣瀬伸良: 日本武道学会 第40回大会号 22: 2007

中村 充の項 参照

岩井 秀明

【著書】

1. 看護大事典 改訂版(和田 攻, 南 裕子, 小峰光博 総編), 医学書院, 著者: 岩井秀明, 「ダイオキシン, ベンゾピレン, 農薬中毒他41項目」について担当。主に化学物質に関する項目について執筆した。

【原著】

1. **The relationship between stress and lifestyle in the elderly**, Naoki Shida, Naoto Kawahara, Ye Xiong, Kyoko Yamazaki, Yuko Amamiya, Hideaki Iwai, Kazuhiko Machida, *Journal of Physical Fitness, Nutrition and Immunology*,

17(2), 2007, in press

高齢者のストレスと生活習慣の関連を明らかにするために、免疫機能の検査とアンケート調査を行った。ストレスは免疫機能を低下させたが、継続的な運動、十分な食事、十分な睡眠をとる群では、ストレスが軽減されていた。

2. Effect of footbathing and laughter on blood pressure or salivary amylase activity in Japanese adults, Yuko Amamiya, Naoki Shida, Keiichi Ikeda, Shigeru Nakajima, Hideaki Iwai, *Journal of Physical Fitness, Nutrition and Immunology*, 17(2), 2007, in press

ストレス緩和のための健康法のうち、森林浴、足湯、笑いの効果を、ストレス指標の唾液アミラーゼ活性と血圧により評価した。高齢者では足湯が効果的であったが、血圧も変動し、実施に当たっては注意が必要である。

3. Suppressive effect of dietary histidine-rich protein on food intake under protein-rich condition especially in female

Shigeru Nakajima, Setsuko Inoue, Takahide Tsuchiya, Hideaki Iwai, Yuko Amamiya and Yutaka Inaba, *Journal of Physical Fitness, Nutrition and Immunology*, 17(2), 2007, in press

ヒスチジンは脳内でヒスタミンに変化し、ヒスタミンニューロン活性化による摂食抑制を起こす。ヒスチジン摂取量とBMIとの相関では逆相関が見られた。高ヒスチジン摂取では肥満抑制効果があり、その効果は特に女性において顕著であった。

4. Detection of 6-nitrotryptophan residues in proteins by Western blot analysis and its application for peroxynitrite-treated PC12 cells, Keiichi Ikeda, B. Yukihiko Hiraoka, Hideaki Iwai, Takashi Matsumoto, Reiko Mineki, Hikari Taka, Kenji Takamori, Hideoki Ogawa and Fumiyuki Yamakura, *Nitric Oxide: Biology and Chemistry*, 16(1) 18-28, 2007

池田啓一の項参照

【報告書】

1. 近未来の生活習慣病予防対策, 岩井秀明, 形本静夫, 河合祥雄, 信太直己, 加納達二, 山倉文幸, 千葉県血清研究所記念保健医療福祉基金・調査研究事業研究費

平成17年度報告書

動脈硬化進行度との関連がある血中タンパク質ニトロ化の、ELISAによる測定法の開発を行った。運動により遊離の銅イオンが増えても、血中ヒスチジン濃度が高い時には、それらの銅イオンと配位することによって、過酸化脂質の生成を抑制した。更に、植物エストロゲンの骨形成への作用も検討した。

2. 近未来の生活習慣病予防対策, 岩井秀明, 形本静夫, 河合祥雄, 信太直己, 雨宮有子, 加納達二, 山倉文幸, 千葉県血清研究所記念保健医療福祉基金・調査研究事業研究費平成18年度報告書

動脈硬化症患者の運動・栄養歴から、動脈硬化症形成の好ましくない生活習慣を探索した。また、血中動脈硬化症関連マーカーで有用なものとして、脂質酸化傷害マーカーが挙げられた。さらに、あまり注目されていない動脈硬化症-骨粗鬆症相関の可能性を見出した。

【学会発表】

1. LPS投与ラット臓器中の6-ニトロトリプトファン含有タンパク質の特異的抗体を用いた解析, 池田啓一, 神野宏司, 内藤久士, 古川 覚, 松本 孝, 岩井秀明, 高森建二, 小川秀興, 山倉文幸, 第29回日本フリーラジカル学会学術集会・日本過酸化脂質フリーラジカル学会第31回大会合同学会プログラム・抄録集, p. 69, 名古屋国際会議場 (愛知), 2007. 6

池田啓一の項参照

2. 6-ニトロトリプトファン特異的抗体を用いた機能プロテオミクス, 池田啓一, 神野宏司, 古川 覚, 峯木礼子, 高ひかり, 岩井秀明, 内藤久士, 高森建二, 山倉文幸, 日本プロテオーム機構第5回大会要旨集〜プロテオミクス生物学から医科学研究へ向かう新たな潮流〜, p. 135, 日本科学未来館 (東京), 2007. 7

池田啓一の項参照

3. 内因性活性窒素種によるマクロファージ様培養細胞(RAW264.7)の修飾で生じた6-ニトロトリプトファン残基を含むタンパク質の検出, 池田啓一, 岩井秀明, 峯木礼子, 高ひかり, 松本 孝, 高森建二, 小川秀興, 山倉文幸, 日本トリプトファン研究会第29回学術集会プログラム, p. 37, 昭和女子大学 (東京), 2007. 12

池田啓一の項参照

池田 啓一

【原著】

1. **Detection of 6-nitrotryptophan residues in proteins by Western blot analysis and its application for peroxynitrite-treated PC12 cells**, Keiichi Ikeda, B. Yukihiko Hiraoka, Hideaki Iwai, Takashi Matsumoto, Reiko Mineki, Hikari Taka, Kenji Takamori, Hideoki Ogawa and Fumiyuki Yamakura, *Nitric Oxide: Biology and Chemistry*, 16(1) 18-28, 2007

生体中での検出を視野に入れ、6-ニトロトリプトファンに対する抗体を作成し、活性窒素種を作用させた培養細胞中のタンパク質に存在する6-ニトロトリプトファンを検出した。また、その含有タンパク質の同定を行った。

2. **Effect of footbathing and laughter on blood pressure or salivary amylase activity in Japanese adults**, Yuko Amamiya, Naoki Shida, Keiichi Ikeda, Shigeru Nakajima, Hideaki Iwai, *Journal of Physical Fitness, Nutrition and Immunology*, 17(2), in press 2007

岩井秀明の項参照

【学会発表】

1. **敗血症モデルラットにおける6-ニトロトリプトファン含有タンパク質の解析**, 池田啓一, 神野宏司, 内藤久士, 古川 覚, 高森建二, 小川秀興, 山倉文幸, 第7回日本NO学会学術集会プログラム抄録集, p. 85, ピアザ淡海 (滋賀), 2007. 5

敗血症モデルラットの腎臓中に6-ニトロトリプトファン含有タンパク質を抗体と2次元電気泳動を用いて検出し、ニトロ化ストレスが顕著に増加しているタンパク質を解析した。

2. **HPLC-多チャンネル電気化学検出器による6-ニトロトリプトファンの定量とヒト血清への応用**, 韓 浩先, 嶋田 武, 池田啓一, 小川秀興, 高森建二, 山倉文幸, 第7回日本NO学会学術集会プログラム抄録集, p. 84, ピアザ淡海 (滋賀), 2007. 5

アミノ酸としての6-ニトロトリプトファンの高感度検出法を開発した。また、ヒト血清タンパク質をアミノ酸へ分解後、6-ニトロトリプトファンの検出を行った。

3. **LPS 投与ラット臓器中の6-ニトロトリプトファン含有タンパク質の特異的抗体を用いた解析**, 池田啓一, 神野宏司, 内藤久士, 古川 覚, 松本 孝, 岩井秀明, 高森建二, 小川秀興, 山倉文幸, 第29回日本フリーラジカル学会学術集会・日本過酸化脂質フリーラジカル学会第37回大会合同学会プログラム・抄録集, p. 69, 名古屋国際会議場 (愛知), 2007. 6

LPS 投与ラットの腎臓中に6-ニトロトリプトファン含有タンパク質のプロテオーム解析を行い、標的タンパク質の同定を行った。

4. **6-ニトロトリプトファン特異的抗体を用いた機能プロテオミクス**, 池田啓一, 神野宏司, 古川 覚, 峯木礼子, 高ひかり, 岩井秀明, 内藤久士, 高森建二, 山倉文幸, 日本プロテオーム機構第5回大会要旨集〜プロテオミクス生物学から医科学研究へ向かう新たな潮流〜, p. 135, 日本科学未来館 (東京), 2007. 7

独自に作成した6-ニトロトリプトファンの抗体を用いて、作成した神経炎症モデル細胞におけるプロテオーム解析を行い、7つのタンパク質を同定した。また、生体試料への応用も行った。

5. **高血圧発症後の運動トレーニングが自然発症高血圧ラットの酸化・ニトロ化ストレスに及ぼす効果**, 古川 覚, 木村博子, 向田政博, 山倉文幸, 神野宏司, 池田啓一, 内藤久士, 柿木 亮, 宮下愛未, 第43回高血圧関連疾患モデル学会学術総会抄録集, p. 68-69, 梅田スカイビル・スペース36 (大阪), 2007. 9

自然発症高血圧ラットにおける自発走トレーニングが、心筋におけるニトロ化ストレスを軽減させることを、免疫組織染色などから見いだした。

6. **間違っってFeが入ったヒトMnSODはミトコンドリアに酸化傷害を引き起こす?—in vitro study**, 山倉文幸, 小林一雄, 池田啓一, *BMB2007 (第30回日本分子生物学会年会・第80回日本生化学会大会合同大会) 講演要旨集*, Abstract No. 4P-0550, パシフィコ横浜 (神奈川県), 2007. 12

ヒトMnSODのMnをFeに置換すると、活性の消失、新たなラジカル発生能の獲得、安定性の増加が起こった。ミトコンドリアでMn/Feの恒常性が破れFe濃度が上昇すれば、SODが酸化傷害を引き起こす可能性がある。

7. 内因性活性窒素種によるマクロファージ様培養細胞 (RAW264.7) の修飾で生じた6-ニトロトリプトファン残基を含むタンパク質の検出, 池田啓一, 岩井秀明, 峯木礼子, 高ひかり, 松本 孝, 高森建二, 小川秀興, 山倉文幸, 日本トリプトファン研究会第29回学術集会プログラム, p. 37, 昭和女子大学 (東京), 2007. 12

LPS/IFN- γ 刺激によりマクロファージ系培養細胞から発生した内因性の活性窒素種により, この細胞が顕著にニトロ化されることがわかり, 6-ニトロトリプトファンが生体中でも存在することが示唆された。

大津 一義

1 大津一義; 巻頭言 学校保健の再生を!—ヘルシースクールの推進, 学校保健研究, Vol 4, No. 6, 472, 2007
子ども達の危機的状況への学校の対応策として, ヘルスプロモーションの理念と戦略を取り入れた生き生きスクール推進の必要性と5つの戦略(健康のための政策づくり, 健康を支援する環境づくり, 地域活動の強化, ヘルスサービスの方向転換, 個人の技能開発)について言及した。

2 大津一義; 学会長講演 生き生きスクールの推進, 学校保健研究, Vol 49, suppl., 10~14, 2007
子ども達の危機的状況への学校の対応策として, ヘルスプロモーションの理念と戦略をとりいれた生き生きスクール推進の必要性と環境整備としての健康のための政策づくり, 健康を支援する環境づくり, 地域活動の強化, ヘルスサービスの方向転換と主体づくりとしての, 個人の技能開発について具体的に提言した。

3 大津一義; 健康教育への提言—生き生きスクールの推進を目指して, 学校保健, No. 269, 6~7, 2007
生き生きスクールを推進するには環境整備と健康教育との有機的関連づけが不可欠であるが, 環境整備もつまるところ環境整備関係者の健康教育による資質の向上に左右されることから, 健康教育を中心に全国的展開を提唱した。

4 椎名純代, 山羽教文, 大津一義; スポーツライフスキルの展開の仕方—スポーツマンシップを身に付けるために, 学校保健研究, Vol 49, suppl., 74~75, 2007
子ども達の危機的状況への対応策として, スポーツが

有するスポーツマンシップを身に付けることが効果的である。その方法としてライフスキルの形成過程を経験させることが必要であることから, どのような過程を展開したらよいかについて検討を行った。

5 植草 薫, 大津一義, 出原嘉代子; 意志決定スキル形成のためのワークシートづくり, —「心と健康」5年生の実践を通して, 学校保健研究 Vol 49, suppl., 76~77, 2007

今日の学校教育の方針である「生きる力」を育成する上でライフスキル形成への現場教師の要請が高まっている。中でも, 意志決定スキル形成は上位を占めている。しかし, どのようにして形成したらよいかの研究は緒についたばかりである。そこで, 5年生の「心の健康」の授業を通して, 意志決定スキル形成に有効なワークシートの検討をおこなった。

6 野木英表, 近藤康子, 大津一義, 棚田康夫; 意志決定スキル形成のためのワークシートづくり, —「すくすく育てわたしの体」4年生の保健学習を通して, 学校保健研究, Vol 49, suppl., 78~79, 2007

4年生の「すくすく育てわたしの体」保健学習を通して意志決定スキル形成に有効なワークシートの検討をおこなった。

7 河野奈美, 宮地達也, 大津一義; 人間力育成教育プログラムの開発—必修科目「ソーシャルトレーニング」の実践を踏まえて, 学校保健研究, Vol 49, suppl., 98~99, 2007

文部科学省研究開発学校の指定を受けて, 高等学校通信制課程の教育課程に「ソーシャルトレーニング」の必修科目を位置づけ, ライフスキル形成のための教材や評価法の開発を3年間かけておこなった。引き続き, この経験を基盤にして, 中教審の説く人間力の育成のための教育プログラムを新たに構築し, 全日制課程での展開を試みたので, その実践報告を行った。

8 黒崎宏一, 荒井裕見子, 白石孝久, 出原嘉代子, 延原幸子, 山田浩平, 黒崎愛美, 大津一義; 生活習慣改善計画能力育成のためのワークシート作り—プリシード・プロシードモデルに基づいて—, 学校保健研究, Vol 49, suppl., 104~105, 2007

子どもが生活習慣を改善する上で, 改善に不可欠な要

因を落とさないようにして計画を立てることができるようにすることが重要である。その健康教育の計画モデルとしてPPモデルが健康関連職の間で活用されているが、これを子どもにも応用して、子どもが自ら生活習慣改善の計画を立てることができるワークシートを開発した。

9 前上里直, 山田浩平, 大津一義; **教育系大学生における対人ストレスとアサーションとの関連**, 学校保健研究, Vol 49, suppl., 156~157, 2007

近年, 対人関係でストレスを抱える若者が多く, その原因の1つは自己を適切に表現できないからではないかと考えられることからストレスとアサーションとの関係を検討した。

10 林 正巳, 荒井裕見子, 大津一義, 相川ちづ子; **ヘルシースクールの展開—家庭, 地域と共に歩む楽しい学校づくりをめざして—**, 学校保健研究, Vol 49, suppl., 84~85, 2007

ヘルシースクールの5つの機能を全て取り入れ, しかも, 家庭, 地域との連携を実践している生き生きスクールの模範的な学校づくりであることを報告し, 他校での本質的取り組みへの提言を行った。

11 板木孝悦, 志野治子, 島崎 均, 大津一義; **チームワークで築くヘルシースクール—家庭, 一地域とともに喜び分かち合う学校づくりをめざして—**, 学校保健研究, Vol 49, suppl., 86~87, 2007

生き生きスクールの模範例であり, この実践報告を通して, 生き生きスクール本来の学校づくりには, 教職員, 保護者等との協働が不可欠であることと人が変わってもビジョンを受け継ぐようにしておけば継続が可能であることを説いた。

12 大津一義, **ヘルスカウンセリング研究会; 新連載続・健康教育最前線, 学校教育新聞**, 7回(886号)~16回(906号), 2007年1月~9月

器質性障害の疑いのある男児, 場面緘黙男児, 喘息・肥満, アレルギーを持つ男児, 遺糞をする男児, 不登校女児, いじめにあった女生徒に対するヘルスカウンセリングのケーススタディの結果について連載した。

金子今朝秋

論文

大学短距離走者におけるスプリントバウンディング及びバウンディング運動のトレーニング効果について 著者: 米津 毎, 青木和浩, 佐久間和彦, 越川一紀, 金子今朝秋 陸上競技研究 69: 22~29, 2007. 6

「青木和浩」の項参照

学会発表

投擲競技者を対象としたウエイトトレーニング後のWGH 摂取検討: 青木和浩, 高梨雄太, 鯉川なつえ, 鈴木良雄, 金子今朝秋, 澤木啓祐 陸上競技学会第6回大会: 2007. 8

「青木和浩」の項参照

柳谷登志雄

[著書]

1) 「健康運動指導実践マニュアル」文光堂. 2008年2月発行予定. (「II. 健康運動指導に必要な運動生理学・バイオメカニクスの基礎知識, 2 バイオメカニクス, ② 関節運動と全身運動」の項目を担当.)

[論文]

1) Kohmura, Y., K. Aoki, H. Yoshigi, K. Sakuraba, T. Yanagiya. **Developments of a Baseball Specific Battery of Tests and a Testing Protocol for College Baseball Players.** The Journal of Strength and Conditioning Research, In Press.

2) 秋山祐介, 有川秀之, 柳谷登志雄, 宮本 彩. **ハードル走における4区間のハードリング動作変化に関する事例的研究.** 埼玉体育学研究. 印刷中.

3) 松尾彰文, 杉田正明, 広川龍太郎, 柳谷登志雄, 阿江通良. **スピード分析からみた100 m レース.** 陸上競技学会誌, Vol. 6, Supplement, 2007.

4) 持田 尚, 松尾彰文, 柳谷登志雄, 矢野隆照, 杉田正明, 阿江通良. **Overlay 表示技術を用いた陸上競技400 m 走レースの時間分析.** 陸上競技研究紀要, Vol. 3, 2007.

5) 持田 尚, 杉田正明, 広川龍太郎, 高野進, 川本和久, 柳谷登志雄. セイコースーパー陸上2006ヨコハマにおける400 m 走競技者の疾走スピード変化について — 11区間平均疾走スピードの変化から—. 陸上競技研究紀要, Vol. 3. 2007.

[雑誌記事・報告書]

1) 柳谷登志雄, 秋山祐介, 八幡賢司. 陸上競技のサイエンス ～ハードル走の技術を身体重心速度変化から分析する. 月刊陸上競技 4月号, pp 131-133, 2007年.

2) 柳谷登志雄, 松本哲也. 陸上競技のサイエンス～スプリント疾走時の下肢筋群の神経筋活動について. 月刊陸上競技 5月号, pp 157-159, 2007年.

3) 持田 尚, 柳谷登志雄. ベストパフォーマンス分析@佐賀インターハイ2007, バイオメカニクスレポート. 男子110 mH 目を引く中盤の走り. スムーズな加速と高い走スピードが好記録の要因. 陸上競技マガジン11月号, pp 145, 2007.

4) 柳谷登志雄, 渡辺圭佑, 斎藤庸介, 糞谷和人. ベストパフォーマンス分析@佐賀インターハイ2007, バイオメカニクスレポート. 男子100 m トップスピードの速さとスピード持久力で勝負した小林. 陸上競技マガジン11月号, pp 146, 2007.

5) 柳谷登志雄, 斎藤庸介, 渡辺圭佑, 糞谷和人. ベストパフォーマンス分析@佐賀インターハイ2007, バイオメカニクスレポート. 女子100 m 40 m 以降に中野を引き離れた寺田. 陸上競技マガジン11月号, pp 150, 2007.

6) 柳谷登志雄, 小山桂史, 杉田正明. 世界陸上大阪大会総括企画 6 日本チームが世界トップクラスのパスワークを証明, 男子4×100 mR 決勝に見るバトンパスワーク. 陸上競技マガジン12月号 pp 154-155, 2007.

7) 柳谷登志雄. どのぐらいありえない!? この必殺技を徹底検証!! . オトナファミ, 2007年夏号.

[学会発表]

1) 柳谷登志雄, 八幡賢司, 高田佑輔, 秋山祐介, 磯繁雄, 佐久間和彦, 土江寛裕. 「身体重心速度変化から

みたハードル走技術の分析」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).

2) 松尾彰文, 広川龍太郎, 柳谷登志雄, 杉田正明, 阿江通良. 「レーザー方式スピード測定装置による100 m のラップタイム分析」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).

3) 大野史織, 松本哲也, 高田佑輔, 佐久間和彦, 柳谷登志雄. 「外側広筋の筋束長と疾走能力の関係」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).

4) 松本哲也, 高田佑輔, 北村和也, 佐久間和彦, 柳谷登志雄. 「短距離疾走動作に関する検討—MTC 長に着目して—」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).

5) 小山桂史, 高田佑輔, 松本哲也, 北村和也, 柳谷登志雄. 「陸上長距離走競技者の走動作と下肢筋厚, 筋厚比の関係」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).

6) 鈴木晋平, 松本哲也, 高田佑輔, 柳谷登志雄. 「野球のスイング動作のバイオメカニクスの研究 —異なる重量のバットを用いたスイング練習の有効性について—」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).

7) 橋 亮造, 松本哲也, 高田佑輔, 金子今朝秋, 柳谷登志雄. 「三次元 DLT 法を用いた円盤投げ動作の評価ポイント作成の試み」第19回日本トレーニング科学会 (滋賀).

8) 渡辺圭介, 小山桂史, 高田佑輔, 柳谷登志雄. 「アキレス腱モーメントアーム長が垂直跳びの跳躍高におよぼす影響」第20回日本トレーニング科学会 (東京).

9) 大野智穂, 高田佑輔, 柳谷登志雄. 「下肢の筋腱複合体の Stiffness および柔軟性と歩行能力の関係について」第20回日本トレーニング科学会 (東京)

10) 柳谷登志雄, 田代恭平, 高田佑輔, 原田睦己, 加納 實. 「跳馬の助走速度とスコアの関係について」第20回日本トレーニング科学会 (東京).

11) 田代恭平, 高田佑輔, 原田睦己, 加納 實, 柳谷

登志雄.「跳馬の助走に関するバイオメカニクス研究」.
第20回日本トレーニング科学会 (東京).

12) 高田佑輔, 田畑昭秀, 白石裕一, 伊藤和広, 柳谷登志雄, 青木純一郎.「自転車駆動中の車体角度に関する研究」第20回日本トレーニング科学会 (東京).

13) 小山桂史, 渡辺圭介, 高田佑輔, 柳谷登志雄.「バレーボール選手のモーメントアーム長に関する研究」第20回日本トレーニング科学会 (東京).

加納 實

[論文]

「男子体操競技選手の手関節の発生機序に関する一考察」

関口晃子, 桜庭景植, 加納 實

体操競技・器械運動研究会誌 15: 43-54, 2007

男子体操選手において, あん馬による手関節背屈の疼痛は多くの選手が経験していた. 本研究ではジュニア期や初心者において, 両足旋回を数多く練習する際の提言を行った.

「大学一部校部員数の推移及び就業に関する調査」

加納 實, 松田一如

体操競技・器械運動研究会誌15: 体操競技に関する基本調査第九報, わが国の大学体操競技部に関する基本調査, 60-66, 2007

アンケート調査の考察から, 部員数は一部校全体としてみると上昇傾向にあることが分かった. また, 就業については学校教育関係も少しずつ増えており, 今後は教員の道も伸びる可能性を秘めている.

[学会発表]

つり輪における「後方かかえ込み2回宙返り懸垂(グチョギー)」の技術に関する一考察

斎藤良宏, 加納 實, 原田睦巳

日本体操競技・器械運動学会第21回大会, 2007

中村 恭子

<論文>

学習成果から見たダンスの教材特性の検討—生徒の学習評価の観点から— 中村恭子, 浦井孝夫 順天堂大学スポーツ健康科学研究 11, pp 10-20, 2007. 3

中・高生のダンス学習評価から5因子を抽出. その比較から, 創作ダンスは「創る」「観る」「関わる」「踊る」能力を高め, 現代的なリズムのダンスは踊る「楽しさ」から愛好的態度を形成しやすい教材であると判明した.

精神科デイケア通所の統合失調症患者を対象としたダンス・アクティビティの適用の試み 中村恭子, 広沢正孝, 岩崎 香, 古川育美, 井原 裕, 石井正紀 順天堂大学スポーツ健康科学研究 11, pp 85-94, 2007. 3

統合失調症患者8名を対象にダンス・アクティビティを4ヶ月間実施した結果, 症状の改善(担当医師評価), 不安気分の改善(自己評価), 日常生活行動の改善(職員の観察評価)などが認められた.

<学会発表等>

精神科デイケア通所の統合失調症患者を対象としたダンスアクティビティの試み(2)—体力および精神面に及ぼす影響について— 中村恭子, 広沢正孝, 岩崎香, 古川育美, 稲見理恵, 石井正紀, 湯田京子, 下境かおり 第50回日本病院・地域精神医学会総会(京都)抄録集, p 141, 2007. 9

統合失調症患者9名を対象にダンス・アクティビティを6ヶ月間実施した結果, 閉眼片足立ちおよび反復横とびが5%水準で向上, 医師の症状評価は有意に好転し, 職員から活動性の向上があったと観察評価された.

生徒の学習評価から見たダンス学習成果と楽しさの因子構造— 日本体育学会第58回大会(神戸)予稿集, p 216, 2007. 9 単著

中・高生のダンス学習評価から得た5因子を好き群・嫌い群で比較した結果, 創作ダンスでは「創る」「観る」学習が「楽しさ」に関係し, 現代的なリズムのダンスでは「踊る」学習が「楽しさ」と関係していた.

<専門誌>

私の考えるダンス学習⑥ ダンスで学ばせたい学習内容 女子体育 49-1, pp 32-33, 2007. 1 単著

ダンス学習は、ダンスの運動技能・表現技能を学び、仲間と協力して課題解決する喜びを体験させるための創作ダンスを中核に、踊る楽しさを知らせる現代的なリズムのダンスをバランスよく配分することが肝要と説いた。

ダイナミックを引き出す「跳ぶ-転がる」女子体育 49-7・8, pp 55-57, 2007. 7 単著

創作ダンス課題学習の運動課題「跳ぶ-転がる」は、高さの変化を表現要素として「大きく動く」を強調できる課題。初心の生徒からダイナミックな動きを引き出すための授業の進め方と指導のポイントについて解説した。

米田 継武

蛙腓腹筋における筋の長さ-張力関係と筋硬度の比較。 村山光義, 内山孝憲, 米田継武, 第139回日本体力医学会関東地方会, (明治学院大学:白金C), 2007年3月, 体力科学 56(5) p 523

本研究は、収縮張力に依存した筋硬度特性が異なる筋長においても成り立つか検討した。その結果、筋の長さ-張力関係のほぼ全域において、筋硬度と筋張力には有意な直線関係が示された。

Cortical potentials related to recruiting single motor units in man. 一運動単位動員に関わる皮質電位一。 山中 航, 笹田周作, 井桁良平, 遠藤隆志, 米田継武, 第84回日本生理学会, 2007年3月, 大阪, J Physiol. Sci. 57(Suppl) 2PIA-012 s160.

皮質の運動神経制御を運動単位活動から逆行的に検索した。表面筋電図活動のみならず、運動単位皮放電を記録しそれを駆動源に同時記録の脳波から平均加算法で関連電位の抽出を試み、結果的に2種類の関連電位を得た。

Muscle hardness depended on tension developed during muscle lengthening and contraction. Murayama M, Watanabe K, Kato R, Uchiyama T, Yoneda T. 12th Annual Congress of the European College of Sport Science, (Jyväskylä, Finland), 2007年7月, Abstract P 537-538

蛙の摘出筋を用い、筋長が変化しても筋硬度が収縮張力に依存した増加特性を示すか検討を行った。その結果、両者には高い相関関係が得られ(相関係数 $r=0.86$)、特に上行脚で筋硬度の張力依存性が高かった。

前腕姿勢の違いによる手関節協働筋伸長反射活動 井桁良平, 木藤友規, 遠藤隆志, 米田継武, 第15回日本運動生理学会大会, 2007年7月, 弘前

手根関節は屈曲伸張が可能で橈尺関節の変位(回内, 回外)で協働筋間の筋伸長率が異なる。差のある伸張度の各協働筋への神経制御は同等かどうか検討した。伸長度に差のある各筋にその差に対応する反射性放電を得た。

伸張性運動による筋損傷が中枢および末梢性疲労の発現に及ぼす影響 遠藤隆志, 米田継武, 佐賀典生, 土屋 基, 笹田周作 第15回日本運動生理学会大会(弘前), 平成19年7月

伸張性運動後の筋損傷と筋疲労の関連性を検証するため、伸張性及び短縮性運動直後に筋疲労テストと経頭蓋磁気刺激実験を行った。結果は中枢性、末梢性疲労共に伸張性運動直後に亢進した。

等速性パワー発揮中の皮質脊髄路の興奮性および皮質内抑制について。 遠藤隆志, 笹田周作, 佐賀典生, 米田継武, 第62回日本体力医学会大会(秋田:ノースアジア大学), 平成19年9月 体力科学 56(6)

力と角速度の異なるパワー発揮中に経頭蓋磁気刺激を与えた。誘発電位と放電消失期間は筋力に伴って変動したが速度変化の影響は乏しかった。パワー発揮の皮質出力特性と皮質内抑制を修飾するのは力要因と思われる。

静脈閉塞時の組織容積変化と筋硬度の関係。 村山光義, 米田継武 第62回日本体力医学会, (秋田:ノースアジア大学), 2007年9月, 体力科学 56(6) p 646

静脈閉塞による組織容積変化に伴う筋硬度を、運動性充血時(先行研究)と比較した。その結果、組織容積増大に比例し筋硬度が増加した。その割合は先行研究とほぼ一致し、約3%の周径増大で筋硬度は2倍に増加した。

Effect of muscle damage immediately after intensive eccentric contractions on corticospinal excitability and cortical inhibition. Endoh T, Yoneda T, Sasada T, Nakajima T, Tazoe M, Sakamoto N, Saga M, Tsuchiya T, Komiyama T. Neuroscience 2007 (San Diego), 平成19年11月

経頭蓋磁気刺激を伸張性および短縮性運動直後与えた。伸張性運動後には皮質脊髄路の興奮性と背景筋電図

量は増大したが短縮性運動後は変化なかった。伸張性運動後の筋損傷は皮質脊髓路と上位脳活動を亢進させる。

両手協調動作時のタイミング判断における感覚情報の寄与, 木藤友規, 米田継武, 第37回日本臨床神経生理学会学術大会, 2007年11月, 宇都宮

両手動作の時間判断特性から, 左右別々の脳半球に到達する感覚情報の統合機構について検討した。—木藤友規の項参照—

Stretch reflex activities of wrist flexor synergist during pronation and supination, Igeta R, Kito T, Okawa Y, Ogata K, Endoh T, Yoneda T, Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science, 2007 12月, Hiroshima, Japan.

姿勢により筋伸張度が異なる協働筋をもつ関節と運動のモデルに手関節運動を用い, 予備緊張のある条件で有無別に伸張刺激への反応特性を調べた。随意運動中の反射活動変容に対する中枢性と末梢性入力の影響を階層的に検討した。

大友 泰司

著書

『世阿弥と禅』 翰林書房 2007. 11. 20.

世阿弥は奈良の補巖寺に於いて出家修行し, 曹洞禅を修めていた。同寺同年代の傑僧, 太容梵清とは兄弟弟子である。梵清は『正法眼蔵』の研究家でもあり, 世阿弥が多大な影響を受けた僧である。

形本 静夫

1 原著論文

Ogura Y, Naito H, Tsurukawa T, Ichinoseki-Sekine N, Saga N, Sugiura T, and Katamoto S. **Microwave hyperthermia treatment increases heat shock proteins in human skeletal muscle**. Br. J. Sports Med. 41, 425-429, 2007

Ichinoseki-Sekine N, Naito H, Saga N, Ogura Y, Shiraiishi M, Giombini A, Giovannini V, Katamoto S. **Changes in muscle temperature induced by 434-MHz microwave hyperthermia**. Br. J. Sports Med. 41, 453-455 2007

Ogura Y, Miyahara Y, Naito H, Katamoto S, Aoki J. **Duration of static stretching influences muscle force production in hamstring muscles**. J Strength Cond Res 21, 788-792, 2007

2 事例研究・研究報告

綾部誠也, 佐藤和樹, 小林生海, 鈴木大地, 形本静夫, 内藤久士. **大学競泳選手におけるスタビライゼーション能力と競泳競技との関連性**. トレーニング科学 19 (3), 275-281, 2006

綾部誠也, 辻川比呂斗, 宮原祐徹, 黒坂光寿, 佐賀典生, 笹田周作, 内藤久士, 形本静夫, 米田継武. **大学アルペンスキー選手のオフシーズンの有酸素性作業能と身体組成の変化**. 順天堂大学スポーツ健康科学研究 11号, 73-79, 2007

関根紀子, 関根正樹, 田村俊世, 内藤久士, 形本静夫. **高齢者における杖歩行時の歩数計測法の開発**. デザントスポーツ科学 28, 155-161, 2007

3 著書

形本静夫. **スポーツ医に必要な運動生理学**. 越智光夫編, 最新整形外科学 23, 初版, スポーツ障害 第1章 基本的事項, 2-6, 中山書店: 東京, 11月, 2007

4 解説等

綾部誠也, 内藤久士, 形本静夫. **誰にでもできる健康づくりのための運動**. 食と健康 51 (3), 51-57, 2007

形本静夫. **クールダウンの3つの働き**. 保健ニュース 1379, 1, 2007

形本静夫. **ウォームアップ**. 保健ニュース 1385, 1, 2007

形本静夫. **自転車で健康になる**. 毎日らいふ 38 (8), 11-14, 2007

5 学会発表

1) 国際学会

Ayabe M, Katamoto S, Matsuduki H, Seo A, Haruyama Y, Tomita S, Haratani T, Akiyoshi Ito A, Muto S, Muto T.

Effects of heat source with cooking heater on physiological responses: Comparison of induction heating system versus gas burner. 18th Japan-China-Korea Joint Conference on Occupational Health

Matsuzuki M, Ayabe M, Haruyama Y, Seo A, Katamoto S, Ito A, Muto T. **The relationships between the ‘heat’ and ‘burden’ felt by workers and their work environment.** 18th Japan-China-Korea Joint Conference on Occupational Health

Haruyama Y, Muto T, Matsuzuki H, Muto S, Tomita S, Haratani T, Itoh A, Seo A, Ayabe M, Katamoto S. **An evaluation of thermal stress in the Kitchen working environment by a self-reporting questionnaire.** 18th Japan-China-Korea Joint Conference on Occupational Health

Kurosaka M, Naito H, Ogura Y, Ayabe M, Miyahara Y, Saga N, Katamoto S. **Effect of spontaneous running training on heat shock protein in rat plantaris muscle.** The 54th American College of Sports Medicine annual meeting, New Orleans, May, 2007, Medicine and Science in Sports and Exercise, 39: 5 supplement, S37, 2007.

Ichinoseki-Sekine N, Naito H, Saga N, Ogura Y, Katamoto S, Shiraishi M, Giombini A, Giovannini V. **Muscle Temperature Responses to 434- and 2450-MHz Microwave Hyperthermia.** The 54th American College of Sports Medicine annual meeting, New Orleans, May, 2007, Med Sci Sports Exerc. 2007, 39 (5 Suppl): S367-8

Miyahara Y., Naito H, Ogura Y, Saga N, Kurosaka M, and Katamoto S. **Effect of static and ballistic stretching on maximal voluntary contraction.** The 54th American College of Sports Medicine annual meeting, New Orleans, May, 2007, Medicine and Science in Sports and Exercise 39: 5 supplement, 2007.

Ayabe M, Brubaker PH, Mori Y, Kumahara H, Naito H, Katamoto S, Tanaka H. **Increasing Physical Activity Levels in Chronic Disease Populations: Does Type of Activity Monitor Make a Difference?.** The 54th American College of Sports Medicine annual meeting, New Orleans,

May, 2007, Medicine and Science in Sports and Exercise, 39: 5 supplement

Ayabe M, Suzuki D, Kobayashi I, Naito H, Katamoto S, Aoki J. **Body temperature after the open water swimming.** 12th annual congress of European College of Sports Science annual meeting, Jyvaskyla, Finland, July, 2007.

Saga N, Kobayashi H, Endo T, Ogura Y, Miyahara Y, Naito H, Katamoto S. **Effect of timing of heat treatment on muscle damage and muscle soreness.** The 12th annual congress of European College of Sports Science annual meeting, Jyvaskyla, Finland, July, 2007.

Miyahara Y., Naito H, Ogura Y., Tsujikawa H, Yoshimura M and Katamoto S. **Effect of static stretching on maximal voluntary isokinetic torque production.** 12th annual congress of European College of Sports Science annual meeting, Jyvaskyla, Finland, July, 2007.

Ichinoseki-Sekine N, Naito H, Ogura Y, Kakigi R, Saga N, Kurosaka M, Shiraishi M, Giombini A, Giovannini V, Suguira T, Katamoto S. **434-MHz microwave hyperthermia treatment increases HSP72 in human skeletal muscle.** 12th annual congress of European College of Sports Science annual meeting, Jyvaskyla, Finland, July, 2007.

Akin S, Naito H, Ogura Y., Ichinoseki-Sekine N, Kurosaka M, Kakigi R, Katamoto S, Demirel H. **Short term treadmill exercise-induced adrenal HSP70 expression is depend upon exercise-related elevation of body temperature.** 3rd Cell Stress Society International Congress on Stress Responses in Biology and Medicine and 2nd World Conference of Stress, Budapest, Hungary, August, 2007.

2) 国内学会

(1) 講演

形本静夫. **高齢者における歩行の意義.** 第14回日本健康体力栄養学会, 千葉, 3月, 2007

形本静夫. **スポーツ健康医科学研究所の現状.** 第41回順天堂大学スポーツ医学研究会, 東京, 9月, 2007

(2) 一般発表

北爪佑美, 長田朋樹, 形本静夫, 内藤久士, 綾部誠也. 女子学生における身体活動水準と身体作業能の関連性. 第14回日本健康体力栄養学会, 千葉, 3月, 2007

加賀山淳, 宮原祐徹, 形本静夫, 内藤久士, 綾部誠也. 随意的噛みしめ動作が柔軟性へ及ぼす影響. 第14回日本健康体力栄養学会, 千葉, 3月, 2007

小川大志, 宮原祐徹, 内藤久士, 形本静夫, 綾部誠也. 一人でやるPNFストレッチの有効性に関する研究. 第14回日本健康体力栄養学会, 千葉, 3月, 2007

佐賀典生, 遠藤隆志, 内藤久士, 形本静夫. 温熱負荷が伸張性筋力発揮に及ぼす影響. 第15回日本運動生理学会大会, 弘前, 7月, 2007

小倉裕司, 内藤久士, 関根紀子, 黒坂光寿, 形本静夫. 運動に伴う体温上昇と血漿熱ショック蛋白質濃度の関連性. 第15回日本運動生理学会大会, 弘前, 7月, 2007

綾部誠也, 青木純一郎, 鈴木大地, 小林生海, 内藤久士, 形本静夫. 加速度計内蔵防水機能付小型身体活動モニタによる自由形泳の泳速度およびストロークの評価の有用性. 第57回日本体育学会大会, 9月, 神戸, 2007

形本静夫, 志村 祥. 自転車エルゴメータ運動およびトレッドミル走行による実測最大酸素摂取量の比較. 第62回日本体力医学会, 秋田, 9月, 2007

小林生海, 内藤久士, 綾部誠也, 鈴木大地, 山岸威夫, 形本静夫, 青木純一郎. 一定の血中乳酸濃度に相当する泳速度およびCSSとオープンウォータースイミングの競技記録との関係. 第62回日本体力医学会, 秋田, 9月, 2007

綾部誠也, 青木純一郎, 熊原秀晃, 内藤久士, 形本静夫, 田中宏暁. エクササイズガイド充足者の中等度身体活動の継続時間と頻度. 第62回日本体力医学会, 秋田, 9月, 2007

佐賀典生, 小林裕幸, 遠藤隆志, 関根紀子, 小倉祐

司, 内藤久士, 形本静夫. 伸張性運動直後の温熱負荷が筋痛・筋損傷に及ぼす影響. 第62回日本体力医学会大会, 秋田, 9月, 2007

関根紀子, 内藤久士, 小倉裕司, 白石 稔, 形本静夫. 434 MHz マイクロ波温熱負荷に対するヒト骨格筋HSP72応答. 第62回日本体力医学会大会, 秋田, 9月, 2007

熊原秀晃, 綾部誠也, 飛奈卓郎, 吉村英一, 形本静夫, 青木純一郎, 清永 明, 安西慶三, 田中宏暁. メタボリックシンドローム患者の中等度身体活動パターンに関する検討. 第27回日本肥満学会, 10月, 2007

澤木 啓祐

長距離ランナーの高地トレーニングにおける高濃度酸素水摂取の効果: 安養寺俊隆, 鯉川なつえ, 仲村 明, 吉儀 宏, 澤木啓祐, 陸上競技研究 69(2): 30-37, 2007. 5

鯉川の項参照

(学会発表)

投擲競技者を対象としたウエイトトレーニング後のWGH摂取の検討: 青木和浩, 高梨雄太, 鯉川なつえ, 鈴木良雄, 金子今朝秋, 澤木啓祐, 陸上競技学会第6回大会: 27, 2007. 8

青木の項参照

サッカー・バレーにおける運動後のWGH摂取の効果: 青木和浩, 鯉川なつえ, 鈴木良雄, 吉儀 宏, 長岡功, 澤木啓祐, 日本臨床スポーツ医学会誌 15(4): 175, 2007. 11

青木の項参照

女子長距離ランナーにおける練習状況, 体調および疲労性骨障害が骨塩量および骨代謝マーカーに与える影響: 石川拓次, 桜庭景植, 丸山麻子, 鯉川なつえ, 澤木啓祐, 日本臨床スポーツ医学会誌 15(4): 212, 2007. 11
石川の項参照

(学会講演)

スポーツ医学の応用と一貫指導システム—箱根駅伝に

みる医科学的アプローチ：第33回整形外科スポーツ医学会，第33回日本関節鏡学会，日本膝関節学会，札幌コンベンションセンター (2007. 6)

世界陸上の位置づけ・大阪ブランドの構築に向けて：関西経済連合会，文化・観光委員会講演，大阪市 (2007. 8)

内藤 久士

原著論文

Regular exercise reduces 8-oxodG in the nuclear and mitochondrial DNA and modulates the DNA repair activity in the liver of old rats. Nakamoto H, Kanekob T, Tahara S, Hayashia E, Naito H, Radak Z, Goto S: *Exp. Gerontol.* 42(4): 287-295 (2007)

リハビリテーション医学における熱ショック蛋白質—脳卒中麻痺患者の骨格筋における健側と麻痺側の発現量の検討. 鶴川俊洋, 間嶋 満, 牧田 茂, 内藤久士, 小倉裕司: *J. Clin. Rehabilitation* 16(5): 488-491 (2007)

Microwave hyperthermia increases heat shock proteins in human skeletal muscle. Ogura Y, Naito H, Tsurukawa T, Ichinoseki-Sekine N, Saga N, Katamoto S, Sugiura T.: *Br. J. Sports Med.* 41: 425-429 (2007)

Changes in muscle temperature induced by 434-MHz microwave hyperthermia. Ichinoseki-Sekine N, Naito H, Saga N, Ogura Y, Shiraishi M, Giombini A, Giovannini V, Katamoto S.: *Br. J. Sports Med.* 41: 453-455 (2007)

Hyperthermia induced by microwave diathermy in the management of muscle and tendon injuries. Giombini, A., Giovannini, V., Di Cesare, A., Pacetti, P., Ichinoseki-Sekine, N., Shiraishi, M., Naito, H., Maffulli, N.: *Br Med Bull* 83: 379-396 (2007)

Duration of static stretching influences muscle force production in hamstring muscles. Ogura Y, Miyahara Y, Naito H, Katamoto S, Aoki J.: *J. Strength Cond. Res.* 21(3): 788-492 (2007)

専門誌・報告書等

高齢者における杖歩行時の歩数計測法の開発. 関根紀子, 関根正樹, 田村俊世, 内藤久士, 形本静夫: *デサントスポーツ科学* 28: 155-161 (2007)

基礎体力の向上をめざす生涯にわたる健康教育の総合的研究 研究代表者：立田慶裕：第1部7章「日本人の体力の現状をその課題」(pp 85-94)：平成16-18年度国立教育政策研究所 政策研究課題リサーチ経費最終報告書 (2007)

健康・体力づくりの歴史. *体育の科学* 57: 451-456 (2007)

平成十八年度 **体力・運動能力調査報告書.** 青木純一郎, 内藤久士, その他体育局担当官4名：文部科学省 (2007)

招待・シンポジウム講演等

「**新体力テスト**」のその後. 測定評価学会第6回大会シンポジウム. 平成19年3月4日

「**新体力テスト**」の再検証. 第58回日本体育学会測定評価分科会. 平成19年9月5日

骨格筋機能に関わる遺伝子多型—ACTN3 遺伝子型とスポーツ・トレーニング. 第62回日本体力医学会大会(山形県)シンポジウム. 平成19年9月15日

温熱負荷とトレーニング. トレーニング科学研究会. 平成19年11月18日

Microwave treatment induced HSP72 expression in human skeletal muscle. Naito H., Ichinoseki-Sekine N. XIth Turkish Sport Medicine conference, Keynote lecture (Antalya). 平成19年12月7日

国際(海外)学会発表

Effects of spontaneous running on heat shock protein in rat plantaris muscle Kurosaka M., Naito H., Ogura Y., Ayabe M., Miyahara M., Saga N., and Katamoto S. 54th ACSM Annual Meeting (New Orleans). 平成19年5月31日

Acute effect of ballistic stretching on maximal voluntary contraction. Miyahara Y., Ogura Y., Naito H., Katamoto S., Ayabe M. 54th ACSM Annual Meeting (New Orleans). 平成19年 5月31日

Cardiac Rehabilitation Improves Metabolic Risk Factor and Inflammatory State in Patients after Cardiac Bypass Surgery. Onishi T., Shimada K., Sumide T., Kawakami K., Omura H., Masaki Y., Fukao K., Sato H., Sunayama S., Naito H., Amano A., Daida H. 54th ACSM Annual Meeting (New Orleans). 平成19年 5月31日

Muscle temperature responses to 434 and 2450 MHz microwave hyperthermia. Ichinoseki-Sekine N, Naito H, Saga N, Ogura Y, Katamoto S. 54th ACSM Annual Meeting (New Orleans). 平成19年 5月31日

434-MHz microwave hyperthermia treatment increases HSP72 in human skeletal muscle. Ichinoseki-Sekine N, Naito H, Ogura Y, Kakigi 12th ECSS Annual Congress (Jyväskylä). 平成19年 7月12日

Effect of Static Stretching on Maximal Voluntary Isokinetic Torque Production Miyahara Y, Naito H, Ogura Y, Tsujikawa H, Yoshimura M, Katamoto S. 12th ECSS Annual Congress (Jyväskylä). 平成19年 7月12日

Effect of timing of heat treatment on muscle damage and muscle soreness Saga N., Naito H., Endo T., Sekine N., Ogura Y., Kobayashi H., Miyahara Y., Kurosaka M., and Katamoto S. 12th ECSS Annual Congress (Jyväskylä). 平成19年 7月12日

Short term treadmill exercise induced adrenal HSP70 expression is depend upon exercise related elevations of body temperature Akin S, Naito H, Ogura Y, Sekine-Ichinoseki N, Kurosaka M, Kakigi R, Katamoto S, Demirel H. 2nd WORLD CONFERENCE 平成19年 8月24日

河合 祥雄

【原著】

S Kawai, A Kitabatake, H Tomoike, Takotsubo Cardiomyopathy Study Group: **Guidelines for Diagnosis of Takotsubo (Ampulla) Cardiomyopathy.** Circulation J 71(6): 990-992, 2007.

Kawai S.: **Typical and atypical forms of takotsubo (ampulla) cardiomyopathy.** Circ J. 2007 Oct; 71(10): 1665.

【著書・報告書】

河合祥雄：**特発性心筋症に関する研究：一たこつぼ心筋症の病理学的研究一**。厚生労働省難治性克服研究事業：特発性心筋症に関する調査研究〈友池班〉 2006年度報告書 56-57, 2007.

河合祥雄：**いわゆるたこつぼ型心筋障害**。山口 徹，高本諱一，中澤 誠，小室一成編集「Annual Review 循環器2007」，中外医学社，212-217, 2007年，東京。

河合祥雄：**心臓血管系：血管と血力学**。トートラ「人体の構造と機能第2版」，大野忠雄，黒澤美枝子，高橋研一，細谷安彦ほか訳，752-819, 2007，丸善株式会社，東京，2007. 1. 31

山田京志，河合祥雄：**たこつぼ型心筋障害**。松森昭編集「新目でみる循環器病シリーズ15」，メディカルビュー社，東京，265-271.

河合祥雄：**特定心筋症（特定心筋疾患）**。山口 徹，北原光夫，福井次矢総編集「今日の治療指針2007年度版」医学書院，286-287.

河合祥雄：**特定心筋症（特定心筋疾患）**。山口 徹，北原光夫，福井次矢総編集「今日の治療指針2007年度版（ポケット版）」医学書院，286-287

【総説】

河合祥雄：**たこつぼ心筋症の病理**。診療と新薬 (44) 358-359, 2007.

河合祥雄：感染性心内膜炎（亜急性，急性感染性心内膜炎）．循環器症候群（第2版）Ⅱ—その他の循環器疾患を含めて—，別冊日本臨床，新領域別症候群シリーズ No. 5 322-327, 2007.

河合祥雄：スポーツと循環障害・呼吸器障害．最新整形外科学体系 総編集 越智隆弘 23 スポーツ障害 専門編集 越智光夫，中山書店，東京，468-475, 2007年.

【報告】

河合祥雄，山田京志，鈴木宏昌，成瀬代士久：たこつぼ心筋症における心筋病変分布．厚生労働省難治性疾患克服研究事業特発性心筋症に関する調査研究〈友池班〉．2006年度第2回総会・研究報告会主任研究者：友池仁暢，大阪府吹田，国立循環器病センター図書館，2007. 2. 23

S. Kawai, A. Yamada, H. Daida: **Takotsubo (ampulla) Cardiomyopathy in Japan Pathological Characteristics.** The 1st International Congress of Cardiomyopathies and Heart Failure, Kyoto. Kyoto International Conference Hall, President Matsumori A, Chairpersons Dr. Kasanuki, Dr. Horie.

上野めぐみ，河合祥雄，三野大來，鴨下 博：本邦在宅高齢者の転倒要因メタアナリシス．第71回に日本循環器学会・学術集会，ポートアイランドホテル．2007. 4. 3

河合祥雄，山田京志，鈴木宏昌：たこつぼ心筋症における死亡症例．厚生労働省難治性疾患克服研究事業 特発性心筋症に関する調査研究〈友池班〉 2006年度第2回総会・研究報告会主任研究者：友池仁暢，大阪府吹田，国立循環器病センター図書館，座長砂川憲二．2007. 12. 11

片山桂一，宮坂裕也，河合祥雄，染谷由希，山本正彦：スクーバ潜水が血圧，心拍数に及ぼす影響．体力科学，56(6)，888, 2007.

染谷由希，片山桂一，河合祥雄，加藤卓郎，塩谷みき，仲村 明，澤木啓祐，高田和子：陸上競技者におけ

る上位入賞者と一般競技者の卒業後の生活習慣・健康状態に及ぼす影響．臨床スポーツ医学会誌，15(4)：S171, 2007.

【講演】

河合祥雄：ダイバーに望む安全潜水の考え方～減圧症発症防止策他～．平成19年度 公認スクーバ・ダイビング指導員研修会，ダイビングの安全性向上研究会．名古屋港湾会館 5F, 2007. 4. 23

河合祥雄：スポーツ指導者に必要な医学的知識Ⅰ．平成19年度千葉県スポーツプログラマー等養成講習会，千葉県総合スポーツセンター，スポーツ科学センター，千葉県教育委員会．2007. 6. 16

河合祥雄：メディカルチェック1) 内科．平成19年度千葉県健康生活コーディネーター育成研修カリキュラム，千葉県教育会館 新館501，千葉県健康福祉部長小川雅司．007. 7. 9

河合祥雄：第7回東京都産業医病診連携懇話会，山の上ホテル別館2階「海の間」，座長江幡良晴．2007年7月26日

河合祥雄：たこつぼ心筋症の病理と発症機序．奈良県立医科大学第一内科研究会．2007年8月1日

山田京志，鈴木宏昌，河合祥雄，代田浩之：たこつぼ心筋症剖検例の病理組織学的検討．第29回心筋生検研究会 エーザイ名古屋コミュニケーションオフィス，2007年11月30日

高木篤俊，鈴木宏昌，河合祥雄，山田京志，横山健，正木克由規，華藤芳輝，石田恵美，代田浩之，高瀬優，三谷恵子，松本俊治：発症前より経過観察し得た劇症型心筋炎の1剖検例．第29回心筋生検研究会 エーザイ名古屋コミュニケーションオフィス．2007年11月30日

北村 薫

[原著論文]

1. **Comparative Analysis of Sport Consumer Motivations between South Korea and Japan** 著者：元

晶焜, 北村 薫 Sports Marketing Quarterly Vol. 16 Number 2, 93-105 2007

市場細分化モデルを検証するひとつの方法として、プロサッカーリーグの観戦者を対象にそのモチベーションのあり方を明らかにすることを目的とした。同時に、日本のJリーグと韓国のKリーグを比較することにより、アメリカで一般的に用いられているモチベーション測定の数値が異なる文化においても可能かどうかを検証した。その結果、数値が妥当であること、日本のほうが韓国よりも技術的な要因が強いこと等がわかった。

[著書 (啓蒙書)]

社会福祉士・精神保健福祉士受験ワークブック編集委員会編『社会福祉士・精神保健福祉士受験ワークブック2008』(共通科目)「社会学」283-339担当 2007. 7 中央法規出版

2007年度実施の社会学の問題は、①社会学のオーソドックスな問題と②社会の一般常識を理解できていれば正解を推論できる問題の2つからなることを指摘。内容面で新規の項目を加えて2008年の試験に向けて傾向と対策、学習内容、重要項目等を示した。

桜庭 景植

【原著】

Kim SG, Kurosawa H, Sakuraba K, Ikeda H, Takazawa S. **The effect of initial graft tension on postoperative clinical outcome in anterior cruciate ligament reconstruction with semitendinosus tendon.** Arch Orthop Trauma Surg 126: 260-264, 2006

Sakamoto Y, Sakuraba K, Ohbayashi O, Kawakita K, Inoue T. **Snowboard and skiboard injuries in recent years compared with ski injuries.** The journal of Japanese Society of Clinical Sports Medicine 14: 219-227, 2006

瀬戸宏明, 桜庭景植, 池田 浩, 高澤祐治, 金 勝乾, 黒澤 尚:
膝離断性骨軟骨炎に対する生体吸収性ピンを用いた観血的整復固定術の成績.
整スポ会誌, 26(2): 283-287, 2006.

桜庭景植:

種目別にみたスポーツ障害—競技復帰へのプログラムを中心に—柔道・相撲 4. 膝関節靭帯損傷.
整形外科. 臨時増刊号. 58(8): 1070-1080, 2007.

窪田敦之, 桜庭景植, 石川拓次, 丸山麻子, 角出貴宏, 菅波盛雄, 吉儀 宏:
非荷重による膝関節周囲筋の筋萎縮および筋力低下に対する血流制限の効果.
日本臨床スポーツ医学会誌 15(1): 82-88, 2007.

関口晃子, 桜庭景植, 加納 実:
男子体操競技選手の手関節痛の発生機序に関する一考察.
体操競技・器械運動研究 15: 43-54, 2007.

Yoshimitsu Kohmura, Hiroshi Yoshigi, Keishoku Sakuraba, Kazuhiro Honda, and Kazuhiro Aoki:
Kinetic visual acuity and reaction time in male college students.
Human Performance Measurement 4: 25-30, 2007.

Kazuhiro Honda, Yoshimitsu Kohmura, Kazuhiro Aoki, Hiroshi Yoshigi and Keishoku Sakuraba:
Effect of bunt training employing monocular vision on kinetic and dynamic visual acuity and bunt performance in collegiate baseball players.
Human Performance Measurement 4: 17-24, 2007.

河村剛光, 青木和浩, 吉儀 宏, 桜庭景植, 中丸信吾:
ボールを追従視するトレーニングが中学野球選手の動体視力及び打撃能力に及ぼす影響.
トレーニング科学 19(4): 361-367, 2007.

【著書】

桜庭景植: 整形外科 MRI 診断実践マニュアル 伊藤博元編集 全日本病院出版会, 分担執筆; E 膝関節周辺, 下腿のスポーツ障害の MRI, p211-220, 2007

桜庭景植: 最新整形外科学大系 23巻 スポーツ傷害 越智隆弘 総編集 中山書店 分担執筆 第2章 スポーツ障害と外傷; 傷害の予防, p 38-46, 2007.

桜庭景植: 看護大辞典 第2版, 医学書院, 分担執筆 2007

【学会発表：海外発表】

Keishoku Sakuraba:

The middle to long follow up study of meniscectomy for the discoid lateral meniscus.

Fifth SICOT/SIROT Annual International Conference, 29 Aug-1 Sep, 2007 Marrakech, Morocco. Abstract p. 257, 2007.

S. Ichihara, T. Nakamura, Y. Inada, S. Itoi, A. Nakada, K. Endo, T. Azuma, R. Nakai, S. Tsutsumi, K. Sakuraba, H. Kurosawa:

Development of new nerve guide tube for longer nerve defect.

34th Annual Congress of the European Society for Artificial Organs. Krems, Austria, Sep 5-8, 2007.

【学会シンポジウム，パネルディスカッションなど】

桜庭景植：学生スポーツに対するメディカルサポートの問題点と対策。

JOSKAS meeting (日本整形外科スポーツ医学会，日本膝関節学会，日本関節鏡学会合同)，第33回日本整形外科スポーツ医学会学術集会，札幌，6月14-16日，2007。

整スポ会誌 27(1): 197, 2007.

【学会発表 国内】

桜庭景植，門屋遙香，石川拓次，丸山麻子，窪田敦史，戸塚涼子，澤木啓祐：

足関節靭帯損傷と関節機能評価およびバランストレーニング。

第80回日本整形外科学会学術総会，5月24-27日，神戸日整会誌，81(3): s182, 2007.

高澤祐治，黒沢 尚，池田 浩，川崎隆之，久保田光昭，高澤俊治，金 勝乾，瀬戸宏明，桜庭景植：

トップレベルスポーツ選手における前十字靭帯再建術後スポーツ復帰について。

第33回日本整形外科スポーツ医学会学術集会，札幌，6月14-16日，2007。

整スポ会誌 27(1): 193, 2007.

川崎隆之，黒沢 尚，池田 浩，高澤祐治，久保田光昭，石島旨章，桜庭景植：

変形性膝関節症に対するグルコサミン投与の中期成績。

第32回日本膝関節学会学術集会，札幌，6月14-16日，2007年。

抄録集 p80.

久保田光昭，黒澤 尚，桜庭景植，池田 浩，高澤祐治，瀬戸宏明，川崎隆之，石島旨章，森尾秀徳：

膝離断性骨軟骨炎に対する生体吸収性ピンを用いた靭靱の整復固定術の成績。

第32回日本膝関節学会学術集会，札幌，6月14-16日，2007年。

抄録集 p80.

川崎隆之，黒澤 尚，池田 浩，高澤祐治，久保田光昭，石島旨章，桜庭景植：

変形性膝関節症に対するグルコサミンまたはリセドロネート投与の中期成績。

第19回日本運動器リハビリテーション学会，軽井沢，7月7，8日2007。

運動療法と物理療法，18(2): 108, 2007.

小林 唯，吉本完明，小山孟志，宮本直之，山木俊彦，河野徳良，前山 定，桜庭景植，清水義明：

関東大学バスケットボール連盟におけるフィジカル測定の試み～スプリントと有酸素系能力の測定項目の検証～

第58回日本体育学会，神戸，9月5-7日，2007。

日本体育学会第58回大会予稿集，P271, 2007.

吉本完明，小林 唯，小山孟志，宮本直之，山木俊彦，河野徳良，桜庭景植，前山 定，清水義明：

関東大学バスケットボール連盟におけるフィジカル測定の試み～測定結果の報告～

第58回日本体育学会，神戸，9月5-7日，2007。

日本体育学会第58回大会予稿集，P272, 2007.

河村剛光，青木和浩，吉儀 宏，桜庭景植，戸塚涼子，本田和寛：

動体視力の発達に関する研究，東京，9月15日，2007。

丸山麻子，加藤祐子，小池 朗，小山良治，星本正姫，山田樹央，桜庭景植，高山重光：

境界型糖尿病患者 (PDPt) に対する運動・食事療法の効果 (第1報)

第18回日本臨床スポーツ医学会学術集会，別府，11月3，

4日, 2007.

日本臨床スポーツ医学会誌, 15(4): s171, 2007.

杉浦雄策, 桜庭景植, 佐久間和彦, 右田孝志:
牽引走トレーニングがCK値と筋の痛みに及ぼす影響.
第18回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 別府, 11月3,
4日, 2007.

日本臨床スポーツ医学会誌, 15(4): s194, 2007.

窪田敦之, 桜庭景植, 石川拓次, 丸山麻子:
加圧量の相違が血流制限による筋力低下抑制効果に与え
る影響.

第18回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 別府, 11月3,
4日, 2007.

日本臨床スポーツ医学会誌, 15(4): s198, 2007.

石川拓次, 桜庭景植, 丸山麻子, 鯉川なつえ, 澤木啓
祐:

女子長距離ランナーにおける練習状況, 体調および疲労
性骨障害が骨塩量および骨代謝マーカーに与える影響.
第18回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 別府, 11月3,
4日, 2007.

日本臨床スポーツ医学会誌, 15(4): s212, 2007.

引地美果, 桜庭景植, 石川拓次, 丸山麻子:
大学女子バレーボール選手に対する体幹部トレーニング
の効果.

第18回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 別府, 11月3,
4日, 2007.

日本臨床スポーツ医学会誌, 15(4): s213, 2007.

【講演】

桜庭景植: スポーツ行事と安全管理～現場における救急
処置～

日本体育協会公認スポーツドクター講習会, 東京, 2月
4日, 2007

桜庭景植: 膝関節疾患と筋力特性～スポーツを中心に～
第47関東整形災害外科学会, 3月23日, 東京, 2007

桜庭景植: 運動療法としての筋力トレーニング.

東京都医師会健康スポーツ医学研修会, 6月3日,
2007.

桜庭景植: トップアスリートのメディカルサポート.
松戸医師会スポーツ医学研究会, 6月27日, 2007.

桜庭景植: 腰痛疾患のみかた.

関東バスケットボール学生トレーナー研修会, 6月30日,
2007.

桜庭景植: 運動と外傷～過労性スポーツ障害～
日本整形外科学会第34回スポーツ医学研修会, 8月10-
12日, 2007.

桜庭景植: トップアスリートのメディカルサポート～箱
根駅伝・オリンピックの個人的サポートから～
相模原医師会整形外科医会講演会, 10月25日, 2007.

桜庭景植: スポーツ指導者に必要な医学的知識Ⅱ(外科).
日本体育協会公認コーチ養成講習会, 東京, 11月14日,
2007.

【研究助成金】

石本記念デサントスポーツ科学振興財団研究助成. 50万
円.

女子長距離ランナーにおける練習状況, 体調および過労
性骨障害が骨塩量および骨代謝マーカーに与える影響.

【原著】

Yoshimitsu Kohmura, Hiroshi Yoshigi, Keishoku Sakura-
ba, Kazuhiro Honda, and Kazuhiro Aoki:

Kinetic visual acuity and reaction time in male college stu-
dents.

Human Performance Measurement 4: 25-30, 2007.

Kazuhiro Honda, Yoshimitsu Kohmura, Kazuhiro Aoki,
Hiroshi Yoshigi and Keishoku Sakuraba:

Effect of bunt training employing monocular vision on ki-
netic and dynamic visual acuity and bunt performance in
collegiate baseball players.

Human Performance Measurement 4: 17-24, 2007.

河村剛光, 青木和浩, 吉儀 宏, 桜庭景植, 中丸信吾:
ボールを追従視するトレーニングが中学野球選手の動体
視力及び打撃能力に及ぼす影響.

トレーニング科学 19(4): 361-367, 2007.